

# 能動的・反応的攻撃性と社会的情報処理による 関係性挑発場面の応答的行動への因果モデルの検証 ——青年期初期と中期の発達の差異の比較——

筑波大学人間系 濱口 佳和

Examining causal relation models of proactive-reactive aggressiveness, social information-processing, and reactive behaviors within provocative situations involving ambiguous relational aggression: Comparing early and middle adolescence

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The present study was conducted to investigate the causal relationships among proactive-reactive aggressiveness, social information-processing (SIP) and reactive behaviors (including relational aggression) within provocative situations involving ambiguous relational aggression and their developmental changes from early to middle adolescence, using the questionnaire method. Junior high school and high school students ( $n = 530$ : 251 boys, 279 girls) in the southern part of Ibaraki prefecture participated in the study. Exploratory factor analysis revealed three SIP factors; namely, hostile and angry SIP, assertive SIP, and positive evaluations of aggressive responses. SEM results indicate that regardless of a strong correlation between proactive and reactive aggressiveness, these make independent contributions to response behaviors, and that there were several differences in the causal processes between junior high school (early adolescents) and high school (middle adolescence) students. The developmental differences are interpreted in terms of both the developmental changes in friendships and changes in brain function during adolescence. The implications of this study were discussed for intervention methods for adolescent aggression.

**Key words:** social information-processing, proactive-reactive aggressiveness, relational aggression adolescence, developmental change

## 問題と目的

児童・生徒間のいじめは多くの国々で見られる現象で(森田, 1998), 学校, 家庭, 地域社会が連携して取り組むべき問題である。日本では既に1980年代の前半から, 仲間によるいじめを原因とする自殺事件が後を絶たず, 解決の難しい大きな教育的問題で

あり続けてきた。2017年度には, 全国の国公立の小・中・高, 特別支援学校で, 学校が認知しているだけでも414,378件ものいじめが発生し, 近年急激に増加の一途をたどっている(文部科学省, 2018)。

いじめの主な手口のひとつに, 「仲間はずれ・集団による無視」があるが, 諸外国と比べると日本ではこの手口が多いのが特徴である(森田, 2001)。この様な行動は関係性攻撃(relational aggression)と呼ばれ, 「他者の友人関係や, 仲間集団の中に入っているという感覚を故意に損なうことを意図して行われ

る行動」と定義され、他者の仲間関係を操作する、特定の人を仲間集団から排除する、特定の人の良い噂を陰で広める等の行動から構成される攻撃行動である(Crick, 1996)。女子が男子に比べて親密な関係を重視する仲間関係を形成する傾向があることから、男子よりも女子に特徴的な攻撃行動と考えられていた(Crick & Grotpeter, 1995)。

関係性攻撃については、これまで児童期を中心に、主に幼児期から成人期初期の仲間関係において多くの国々で多数の調査が行われている。質問紙調査による探索的因子分析からは、関係性攻撃は身体的攻撃・言語的攻撃とは区別される攻撃行動で、その個人差は時間的に安定していることが明らかにされているが(Crick & Grotpeter, 1995)、性差については一貫した結果が得られていない(Crick & Grotpeter, 1995; Juliano, Werner, & Cassidy, 2006; Prinstein, Boergers, & Vernberg, 2001)。

関係性攻撃は幼児期から成人期まで、多様な心理的不適応との関連が明らかにされている。関係性攻撃は、仲間からの拒否や孤立をもたらし(Crick & Grotpeter, 1995)、社会的引きこもり、抑うつ・不安、身体的訴え等の内在化問題と同時に反抗挑戦性障害や素行障害等の外在化問題のリスク要因でもある(Crick, Ostrov, & Werner, 2006; Mathieson & Crick, 2010; Prinstein, et al., 2001)。さらに、関係性攻撃は境界性パーソナリティ障害傾向と関連があることも明らかにされている(Crick, Murray-Close, & Woods, 2005; Werner & Crick, 1999)。

関係性攻撃の規定要因についても検討がされており、個人的要因としては、①エフォートフル・コントロール(Rothbart, 2011)やフラストレーション傾向等の気質的要因(Dane & Marini, 2014; Ojanen, Findley, & Fuller, 2012)、②ナルシズム(Barry, Pickard, & Ansel, 2009)、ビッグ・ファイブ特性(特に協調性や誠実性の低さ(Gleason, Jensen-Campbell & Richardson, 2004)等のパーソナリティ要因が取り上げられ、それらとの関連が認められている。また、形成要因としては、親の養育行動や、友人関係が取り上げられ、温かく肯定的な養育の不足や、否定的で荒々しい養育、非関与的養育、心理的コントロール等の多さ(Kawabata, Alink, Tseng, Ijzendor, & Crick, 2011)、排他的で親密な友人関係(Grotpeter & Crick, 1996)、葛藤の多い友人関係(Kokkinos, Voulgaridou, & Marcos, 2016)が関係性攻撃を促進することが明らかにされている。最近では、これらの養育行動や他者との関係が関係性攻撃に及ぼす効果が、子ども自身のパーソナリティによっても異なることに注目が集まり、BIS/BASやCU特性による調

整効果(Kokkinos & Voulgaridou, 2017)や、仲間関係の質(Kawabata, Crick, & Hamaguchi, 2010)やソーシャルサポートによる調整効果(Mukhtar & Mahmood, 2018)が検討されている。また、TVでの関係性攻撃の視聴経験が長期的に関係性攻撃を促進することも知られている(Coyne, 2015)。

以上に加え、最近の研究では、仲間への関係性攻撃の多さが、恋人や配偶者といった別の親密な人間関係における関係性攻撃や関係の満足感の低下・関係の不安定化につながること(Carroll, Nelson, Yorgason, Haper, Hagmann, & Jensen, 2010; Ellis, Chung-Hall, & Duma, 2013; Linder, Crick, & Collins, 2002)、ネットいじめ等サイバー空間中での攻撃行動の先行要因となること等(Kokkinos & Voulgaridou, 2017; 内海, 2010)が明らかにされており、仲間関係から異なる関係性の文脈での研究へと広がりを見せている。

以上の様に、関係性攻撃は幼児期・児童期・青年期を通じて形成され、現在並びに将来の適応にとって、有害な行動であることがわかっている。しかしながら、関係性攻撃への予防・介入的研究は端緒についたばかりであり(Verlaan & Trumel, 2010)、効果的なプログラムの開発が望まれる。そのためには、関係性攻撃が生起する個人内のメカニズムを解明することが不可欠で重要な課題である。

児童・青年の攻撃行動の内的な生起過程は従来、社会的情報処理(social information-processing, SIP; Crick & Dodge, 1994; Dodge, Pettit, McClaskey, & Brown, 1986)という理論的モデルの下で実証的研究が重ねられてきた。このモデルでは、対人相互作用場面に置かれた個人は、一定の生物学的基盤と、過去の生活経験から獲得した社会的知識をデータベースとして持つ情報処理機構と見なされ、周囲の状況や相互作用の相手、自己の身体内部から送られる入力情報を一連のステップに亘って処理し、最終的に社会的行動を出力すると考えられている。

処理ステップは符号化、解釈、目標の明確化、反応検索・構成、反応評価、実行といったステップがあり、いずれかのステップにおけるエラーやバイアスが不適応的な行動の産出につながると考えられている。これまで、特に攻撃的・反社会的な児童・青年を対象に実証的研究が重ねられ、攻撃行動の実行や素行障害等の不適応に導く認知の歪みが明らかにされてきた(初期の研究のレビューは濱口(2002)、最近の研究レビューは河端(2015)参照)。また、感情や道徳判断を組み込んだ改訂モデルも提唱されている(Arsenio & Lemrise, 2004; Lemrise & Arsenio, 2000)。

児童・青年における社会的情報処理と関係性攻撃との関連についての先行研究では、①高関係性攻撃児には、道具的挑発場面の社会的情報処理には問題が見られないのに、関係性攻撃に曝露される場面（関係性挑発場面）において、敵意帰属傾向や否定的感情の喚起が高まりやすいという問題を示すこと（Crick, 1995）、②関係性挑発場面での敵意帰属傾向は、関係性攻撃被害経験が多く、関係性挑発場面での否定的感情喚起が強い女兒において関係性攻撃を促進する（Mathieson et al., 2011）、③関係性攻撃加害経験が多い程、自分が関係性攻撃を行った結果、相手が自分との関係の維持を望むと思う傾向が強い（Goldstein & Tisak, 2004）、④高関係性攻撃児は関係性攻撃についての反応的評価が肯定的（坂井・山崎, 2004）、⑤高関係性攻撃児・高関係性攻撃被害児は、関係性攻撃について偏った知識（より有害性が低く、正当化しやすく、身近で、利便性が高い）を持つ（関口・濱口, 2015）、⑥関係性攻撃についての規範的信念は1年後の関係性攻撃を予測する（Krahé & Busching, 2014）こと等が明らかにされている。

関係性攻撃と社会的情報処理との関連については、徐々に知見が蓄積されているとはいえ、未だ課題も多い。第一の問題点は、ひとつの研究で上げられる社会的情報処理のステップが、解釈（第2ステップ）や反応決定（第5ステップ）等、少数の特定のステップに限定されていることである。社会的情報処理と関係性攻撃との関連の全体像を明らかにするためには、目標の明確化や反応検索・構成ステップ等も含めて網羅的に検討する必要がある。社会的情報処理の指標の扱いには、要因分離的アプローチ（separate-factor approach）と多重指標アプローチ（multiple-indication approach）の2通りがある。前者は社会的情報処理の諸変数をステップごとに分けて分析するアプローチで、後者は社会的情報処理の諸変数を単一の構成概念を表す指標として扱うアプローチである。Pettit & Mize (2007) は、特定の社会的情報処理のバイアスと特定の反社会的行動との関連を検討するには要因分離的アプローチが必要だが、社会的情報処理と行動との関連を検証する上では、多重指標アプローチが理に適っているとしている。本研究はこの2つのアプローチを統合したアプローチをとる。すなわち、関係性挑発場面での社会的情報処理諸変数に探索的因子分析を行うことによって、全ステップにまたがる形で社会的情報処理変数を構造化し、多数に及ぶ社会的情報処理変数を有意味なまとまりのあるいくつかの要因に整理する。この様に構造化され、整理された社会的情報処理の要因を指標とし、それらが関係性攻撃にどの

ように関わるか検討することによって、関係性攻撃の適正化のためのより簡潔で理解しやすい示唆を得ることを目指す。既に道具的挑発場面における社会的情報処理諸変数が複数の社会的情報処理ステップにまたがるステップ縦断的な情報処理のいくつかの因子を構成することが、日本の児童を対象とした質問紙調査によって明らかにされており（濱口, 2004）、同様のことが関係性挑発場面の青年の社会的情報処理にも期待できる。本研究の第1の目的は、関係性挑発場面における社会的情報処理諸変数の因子パターンを明らかにすることである。

関係性攻撃と社会的情報処理との関連についての研究の第2の問題点として、関係性攻撃に代わる適応的な行動と社会的情報処理との関連が検討されていないことが挙げられよう。従来の関係性攻撃と社会的情報処理の関連を検討する諸研究では（Crick, 1995; Crick, et al., 2002; Crick & Werner, 1998）、架空の曖昧な関係性挑発場面が取り上げられてきた。この場面では、関係性攻撃以外にも、多様な応答的行動が可能である。より不適切な行動としては、暴力をふるう・きつい言葉で非難する等の顕在性攻撃も起こりえる。穏やかに理由を尋ねる、怒らずに自分の気持ちを伝える等の主張行動（Deluty, 1979; 平木, 2000）は、逆に適切な対応として考えられる。従来の研究では、架空の関係性挑発場面を用いて、関係性攻撃や顕在性攻撃と社会的情報処理との関連は検討されてきたが、関係性挑発場面での主張行動の様な適応的な行動につながる社会的情報処理のプロセスは検討されてこなかった。しかしこれが明らかになれば、その知見は関係性挑発場面では児童・青年が関係性攻撃やより不適切な顕在性攻撃を抑制し、適応的な対応を促進する心理的介入にとって重要な指針となり得る。そこで本研究の第2の目的として、関係性攻撃に加え、顕在性攻撃と主張行動も取り上げ、これらの行動と社会的情報処理との関連を合わせて検討する。

従来の社会的情報処理研究では、形成要因として親の養育行動や仲間との経験等の生活経験を取り上げ、関連性が検討されてきたが、パーソナリティ要因については殆ど検討されてこなかった。しかし、大学生を対象とした研究ではあるが、関係性攻撃はパーソナリティ障害傾向との関連が示されていることから（Werner & Crick, 1999）、中高生においても、関係性攻撃の実行にパーソナリティ要因が関与することが予測される。その際、最も関連が深いと考えられるのはパーソナリティ特性としての攻撃性である。

社会的情報処理は場面特異的に機能する認知的過

程であるが、その個人差は児童期前半には既に高い時間的安定性を示し (Dodge et al., 2003), 幼稚園時代の社会的情報処理の個人差のパターンが、高校生時代の外在化問題の差をもたらす等 (Lansford et al., 2006), 仲間による挑発場面で攻撃行動を導く安定したメカニズムとして一貫して機能することが知られている。こうした認知的メカニズムを獲得した小学生は、中学生になる頃には、多年に亘り、多様な挑発場面で仲間達への攻撃行動を繰り返し、結果として場面の差を越えて一貫性のある攻撃的な行動傾向、即ち攻撃性の高さを獲得している可能性が高い。従って、中学生の段階では、場面特異的な社会的情報処理は攻撃性というパーソナリティに根差したメカニズムになっていると思われる。

攻撃性は濱口 (2005a) による能動的・反応的攻撃性を取り上げる。攻撃行動は機能によって能動的攻撃 (proactive aggression) と反応的攻撃 (reactive aggression) の2つの類型に大別できることが知られている (Dodge, 1991)。能動的攻撃は道具的攻撃 (instrumental aggression) と類似した概念で、人を傷つけること以外の何らかの結果の獲得を目標とし、その手段として機能する攻撃行動である。反応的攻撃は敵意的攻撃 (hostile aggression; Feshbach, 1964) と類似した概念で、欲求阻止や知覚された脅威などによって誘発され、怒りの表出を伴って、自己防衛や嫌悪刺激に危害を加えることを目標とする攻撃行動である。どちらのタイプの攻撃行動を行いやすいかという観点から攻撃的な子どもが分類されてきた (Dodge & Coie, 1987)。濱口 (2005a) は、能動的・反応的それぞれの攻撃行動を導く認知・感情・欲求の内的特性の組を理論的に演繹し、能動的攻撃性、反応的攻撃性と呼び、中学生・高校生向けに測定尺度を作成している (濱口, 2005b, 2007, 2017; 濱口・藤原, 2016)。関係性挑発場面で青年が働かせる社会的情報処理過程には、この能動的攻撃性と反応的攻撃性が何らかの影響を及ぼし、顕在性攻撃や関係性攻撃を生起させるものと考えられる。本研究ではパーソナリティ要因である攻撃性が、曖昧な関係性挑発場面における社会的情報処理を媒介して関係性攻撃など応答的行動を規定することを実証することを第3の目的とする。

関係性攻撃と社会的情報処理との関連についての研究の第4の問題点として、発達の変化についての検討が不足している点が挙げられる。社会的情報処理モデルは元来、攻撃行動や心理社会的不適応の説明に主眼が置かれており、発達の変化を説明するモデルではなかった。複数の発達段階に共通に適用可能な測定法を用いることの困難や、適応を規定する

社会的場面が加齢に伴って変化するといった問題のため、複数の発達段階に亘って社会的情報処理変数の平均値を比較したり、社会的情報処理と行動との関連の発達段階による差を検討する研究はあまり行われてこなかった。しかし、Crick & Dodge (1994) は、子どもの加齢に伴う変化が社会的情報処理に影響を与え、社会的情報処理と社会的行動や適応との関連に発達の差をもたらす可能性を指摘している。本研究はいじめの発生がピークを迎え、急速に減少する (文部科学省, 2018) 中学生から高校生にかけての青年期に特に関心を寄せる。この変化の背後には、青年期前期から中期にかけての友人関係の発達の变化があると思われる。友人関係は中学から高校にかけて、「広く浅い」つき合いから「広く深い」つきあいへとシフトし (落合・佐藤, 1996), 表面的な類似性・同一性を確認し合う行動が減少する一方、互いの個性を尊重し合いたいという欲求が高まり、互いの違いを認め合って価値観や将来を語り合う相互理解活動が増加することが知られている (榎本, 2000)。関係性挑発場面における社会的情報処理と行動についても、表面的な類似性・同一性の確認の減少や相互理解の高まりを反映した発達の变化が中学から高校にかけてみられるものと思われる。本研究の第4の目的として、青年期前期の中学生と中期の高校生を対象とし、曖昧な関係性挑発場面での社会的情報処理と応答的行動、並びに両者間の関連が、中学生から高校生にかけて、どのように変化するか検討することを目的とする。

## 研究 1

### 目的

研究1では、本研究の第1の目的である曖昧な関係性挑発場面における社会的情報処理の因子パターンを明らかにして尺度構成を行うことを目的とする。なお、曖昧な関係性挑発場面における応答的行動についても同様の分析を行う。

### 方法

#### 1. 調査対象者

茨城県南部の3校の公立中学校1・2年生283名 (男子138名, 女子145名) と5校の県立高等学校1・2年生247名 (男子145名, 女子134名) の合計530名 (男子251名, 女子279名) が対象となった。

#### 2. 調査内容

対象者全員に以下の内容の質問紙が使用された。

##### (1) 自記式能動的攻撃性尺度 (中学生用)

濱口 (2005b) により開発された4件法, 30項目の

尺度で、仲間支配欲求（8項目）、攻撃の問題解決方略への有能感（以下「攻撃有能感」と省略、8項目）、攻撃行動への肯定的評価（以下「攻撃肯定評価」と省略、9項目）、個人的欲求への固執（以下「欲求固執」と省略、5項目）の4下位尺度からなる。

## （2）自記式反応的攻撃性尺度（中学生用）

濱口（2007）により開発された4件法17項目の尺度で、怒り（5項目）、報復意図（7項目）、外責的認知（5項目）から成る。外責的認知は信頼性と妥当性が他の下位尺度に比べてやや不十分なため、本研究では使用せず怒りと報復意図の合計12項目のみを使用した。

（1）（2）はともに元は中学生用に開発された尺度であるが、濱口・藤原（2016）では、反応的攻撃性尺度の外責的認知を除く全尺度を、職業科2校を含む15校2010名の高校生に使用したところ、中学生と同一の因子構造と十分な信頼性が得られ、敵意攻撃インベントリー（秦，1990）、多次元性共感尺度（登張，2003）、関係性攻撃尺度（櫻井，2002）との併存的妥当性が確認されている。そこで本研究では、高校生にも適用し、下位尺度得点算出時に、三鈴・濱口・石川・江口（2007）で因子負荷量が十分高くない、あるいは元の尺度と異なる因子に負荷した3項目を除いて、中学・高校共通の下位尺度を構成して使用した。

## （3）関係性挑発場面の社会的情報処理と応答的行動尺度

調査対象者に、架空の曖昧な関係性挑発場面を文章で提示し、調査対象者自身が物語中に登場する関係性攻撃の被害者であったとしたら、どのように感じ、考え、行動するかを尋ねた。各場面30項目、合計60項目から構成された。

a. 架空の関係性挑発場面：Crick, et al.（2002）が関係性挑発場面における敵意帰属傾向の測定尺度で使用了5場面の中から、日本の中高生でも想像し易い以下の2場面を選択した。①昼ごはんの話：昼食時、知り合いの生徒達が楽しそうに談笑しているテーブルに自分が着席したとたんに、皆話すのをやめて誰も自分に話しかけなかった。②散歩の話：散歩している時反対側から学校の知り合い2人がやってきたので挨拶をしたら、その二人は何も返事をせず、小声でささやき合って歩き去ってしまった。

b. 質問項目：質問項目は各場面の文脈に適合するよう一部で表現が異なるが、内容的には同一のものであった。

①敵意帰属傾向：社会的情報処理の第2ステップに属する変数である。相手の行為を悪意に解釈する傾向で（その生徒達は、あなたにいじわるをしようと

してわざと話をしなかった（あいさつをしなかった）のでしょうか）、各場面1項目、「ぜったいそうじゃない（1点）」～「ぜったいそう（5点）」の5件法で尋ねた。

②喚起された感情：曖昧な関係性挑発場面に直面した際に喚起される感情で、怒り（はらがたつ）と悲しみ（悲しい）各1項目で測定し、「ぜんぜん（1点）」～「とても（4点）」の4件法で尋ねた。

③目標の明確化：社会的情報処理の第3ステップに属する変数で、曖昧な関係性挑発場面に直面して、関係維持（その生徒達とこれからも今までの関係でいたい）、説明の要請（どうして黙って話しかけないのか、理由を説明して欲しい）、報復（その生徒達に仕返しをしたい）、謝罪要求（その生徒達に謝って欲しい）の4つの目標のそれぞれを自分が実現したいと思う程度を各目標1項目で、「全然そう思わない」～「とてもそう思う」の5件法により測定した。

④反応検索と構成：社会的情報処理の第4ステップに属する変数で、曖昧な関係性挑発場面で、調査対象者が思い浮かべる応答的行動の種類を測定するので、相手に言う「セリフ」をフキダシの中に自由記述するよう求め、そのことばを言う時の表情（怒った顔（3点）、ふつうの顔（2点）、笑った顔（1点）の中から一つ）、声の大きさ（小さな声（1点）、ふつうの声（2点）、大きな声（3点））、その時に行う行動（その場から立ち去る（1点）、特に何もしない（2点）、乱暴なことをする（3点））をそれぞれの選択肢の中からひとつ選ばせた。「セリフ」の内容は、APPENDIX に示すカテゴリに分類し、2場面合わせての出現度数が測定された（各カテゴリ0～2の得点範囲）。

⑤反応評価：社会的情報処理の第5ステップに属する変数で、各場面で仮に調査対象者が、顕在性攻撃（怒りをあらわにして、その生徒をきつい言葉で責める）、関係性攻撃（その後、その人達に会った時、しかえしに知らん顔を続ける）、主張行動（理由をふだんと同じ話し方で、たずねる）の3種類の行動をそれぞれ行なったとした場合の結果予期と適切性評価について尋ねた。結果予期は、関係維持目標についての結果予期（攻撃評価1：相手の生徒達はいやな気持ちにならず、そのあとも今までどおりのつき合いができる）と道具的目標についての結果予期（攻撃評価2：いやな気持ちになっているのをわかって、謝ってくれる）をそれぞれ5件法で尋ねた（「ぜんぜんそう思わない（1点）」～「とてもそう思う（5点）」）。適切性評価については、各行動をすることがどの程度適切かを、5件法（攻撃評価3：「ぜんぜん

適切でない（1点）」～「とても適切（5点）」で尋ねた。

⑥**応答的行動**：それぞれの場面において、以下の6種類の行動を示し、自分ならどの程度各行動を行うかを5件法（「ぜったいそうしない（1点）」～「ぜったいそうする（5点）」で尋ねた。a. 身体的攻撃（その生徒達に乱暴なことをする）、b. 言語的攻撃（その生徒達をきつい言葉で責める）、c. 説明要請（その生徒達がどうして黙って話さないのか怒らずに理由を聞く）、d. 不快感の伝達（自分が不快な気持ちであることを、その生徒達に怒らないで伝える）、e. 無視（この次からその生徒達を無視する）、f. 陰口（本人達のいないところで、その生徒達のことを他の生徒達に悪く言う）。なお、6種類の行動の内、a～dは曖昧な関係性挑発に直面したその場で行われる行動、eとfはその場を離れて後で行われる行動として位置づけられた。

### 3. 調査実施方法

授業時間の一部を割いて、担任教師の指導・監督下で学級単位の集団一斉方式により実施された。回答に先立ち、担任教師が表紙の教示文を読み上げ、学校の成績には無関係であること、無記名調査のため個人の回答は特定されないこと、回答する・しないは各自の自由であること、回答したくない項目には回答しなくて良いこと、回答を途中でやめることもかまわないことが伝えられた。所要時間は約15～20分であった。なお、本研究は筑波大学人間総合科学研究科研究倫理委員会（2007年当時）での承認を受けて実施された。

## 結果

### 1. 反応産出過程における言語的反応の分類

本研究では、場面想定法を用いて2つの曖昧な関係性挑発場面での調査対象者の社会的情報処理を質問紙により測定した。第4ステップの反応産出過程の測定は、調査対象者自身がその場面に遭遇した場合に行うとした行動を、言語反応、表情、声の大きさ、動作の4側面から測定した。言語反応は自由記述であったため、その内容をTable 1に示す基準に従って第一著者がカテゴリに分類し、2場面併せて

の生起頻度を、各言語反応カテゴリの得点とした。言語反応カテゴリへの分類の客観性を確認するために、第一著者とは独立に、発達心理学を専門とする博士課程の大学院生と各カテゴリの分類を求め、両者の一致率を算出した。Table 1に示す様にはほぼ全ての言語反応カテゴリで高い一致率が得られ、第一著者の分類の客観性が示された。

### 2. 社会的情報処理変数・応答的行動の因子分析

関係性挑発場面における社会的情報処理と応答的行動の各項目の得点は全て2場面間で合計され、社会的情報処理25変数、応答的行動6変数が算出された。

全変数の記述統計をTable 2に示す。なお、反応産出過程の言語反応「その他」は、生起頻度が極めて低い上に、反応内容も多義的であるため今後の分析から除外することとした。

社会的情報処理24変数について、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。初期の固有値が1.0以上の因子が4因子抽出されたが（固有値は第1因子から順に、3.79, 2.96, 2.24, 1.16。累積寄与率（%）は順に、19.94, 35.50, 47.28, 53.39となった）。第3因子と第4因子間で落差があること、3因子まででおよそ50%の寄与率があること、解釈可能性の理由から、3因子解を採用した。どの因子にも絶対値.30以上の負荷量を示さなかった項目を削除し、因子数3を指定して最終的に得られた因子パターン行列をTable 3に示す。

第1因子は、曖昧な関係性挑発場面で、「怒りをあらわにしてきつい言葉で責め」たり、「次から無視する」などの攻撃的な対応をすることが、関係を維持しながら否定的感情を伝えるのに効果的であり、その場面に適切であるという、攻撃行動の肯定的結果予期と適切性の評価を表す因子と考えられる。これは社会的情報処理第5ステップの反応決定段階の変数から成る因子で、「攻撃評価」と命名した（能動的攻撃性尺度の「攻撃肯定評価」と区別するために、以下「SIP 攻撃評価」と表記する）。

第2因子は「怒らずに理由を尋ねる」という冷静な主張行動が、関係維持と否定的感情の伝達をもたらすという肯定的な結果予期と、場面におけるその

Table 1  
反応検索における言語反応の分類の信頼性

	攻撃行動	否定的主張	質問	肯定的主張	引きこもり行動	総反応数
昼食時の話	84.60	50.00	91.95	82.90	93.75	155
散歩の話	73.68	58.30	80.76	75.00	83.33	158
全体	87.09	54.68	86.66	79.71	89.28	

注) 各カテゴリの表中数値は%, 総反応数は、一致率産出のために使用された反応の総数。

行動の適切性の評価に高い負荷量を示しつつ、説明目標にも中程度の、そして攻撃的反応の産出に低いながらも負の、質問反応の産出に正の因子負荷量を示す因子である。これは、社会的情報処理第5ステップの主張行動への肯定的な評価意識を中心としつつも、第3ステップの目標の明確化、第4ステップの反応検索・構成の変数にもまたがる情報処理ス

テップ縦断的な因子である。曖昧な関係性挑発に直面した際に中・高生に生じる、「相手が黙っている理由を知りたいと願い、攻撃行動ではなく、主張行動（説明要請）を検索・構成し、肯定的に評価する」という一連の思考の流れを表している。これは複数のステップに亘る情報処理の流れを示すもので、「主張的情報処理」と命名した。

Table 2  
社会的情報処理と応答的行動の記述統計

	<i>n</i>	最小値	最大値	<i>M</i>	<i>SD</i>
<b>社会的情報処理</b>					
敵意帰属	530	2	10	7.62	1.59
怒り	528	2	8	6.03	1.49
悲しみ	530	2	8	6.42	1.60
関係維持目標	529	2	10	5.73	2.04
説明要求目標	530	2	10	7.63	2.07
報復目標	530	2	10	5.22	2.31
謝罪要求目標	530	2	10	6.12	2.19
産出（攻撃）	476	0	2	0.15	0.46
産出（否定的主張）	476	0	2	0.42	0.61
産出（質問）	476	0	2	1.01	0.79
産出（肯定的主張）	476	0	2	0.27	0.69
産出（後退）	476	0	2	0.15	0.43
産出（その他）	476	0	2	0.09	0.35
産出（怒り顔）	527	2	6	3.96	0.94
産出（大声）	507	2	6	3.99	0.67
産出（乱暴動作）	511	2	6	3.65	0.73
関係性攻撃評価1	530	2	10	4.12	1.53
関係性攻撃評価2	530	2	10	4.93	1.65
関係性攻撃評価3	530	2	10	5.18	1.71
主張行動評価1	530	2	10	6.24	1.85
主張行動評価2	530	2	10	6.48	1.82
主張行動評価3	530	2	10	6.36	1.81
顕在性攻撃評価1	530	2	10	3.58	1.54
顕在性攻撃評価2	530	2	10	4.35	1.95
顕在性攻撃評価3	530	2	10	4.88	1.83
<b>応答的行動</b>					
理由	530	2	10	6.38	1.77
不快さの伝達	530	2	10	5.83	1.79
顕在性攻撃	530	2	10	4.72	1.83
陰口	530	2	10	4.87	1.95
無視	530	2	10	5.35	1.83
暴力	530	2	10	4.51	1.76

注）関係性（顕在性）攻撃評価1：関係性攻撃（顕在性攻撃）の関係維持目標。達成にとしての肯定的結果予期。関係性（顕在性）攻撃評価2：関係性攻撃（顕在性攻撃）の道具的目標。達成にとしての肯定的結果予期。関係性（顕在性）攻撃評価3：関係性攻撃（顕在性攻撃）の適切性評価。

第3因子は、怒り、謝罪を願う目標設定、敵意帰属といった項目に比較的高い因子負荷量を示し、報復目標、悲しみ、反応検索・構成の「怒顔」にも中程度の因子負荷量を示している。これは、曖昧な関係性挑発場面に直面した青年が、「相手が悪意を持って故意にやった」と思いこみ、怒りや悲しみが喚起されて、謝罪を求め、報復を目指し、怒りの感情を表出した反応を検索・構成するという一連の思考・感情の過程を表している。社会的情報処理の第2から第4までのステップと感情の喚起プロセスから構成され、第2因子同様ステップ縦断的な感情と情報処理の流れを示すもので、「怒り・敵意的情報処理」と命名した。

応答的行動は全部で6種類の行動を2つの仮想場面で測定した。このうち「無視」と「陰口」の2つの関係性攻撃は、他の顕在性攻撃と主張行動とは異なり、曖昧な関係性挑発に直面してから少し時間が経過した後に行われるものである。従って、他の行動と同列に位置づけることは適切ではないので、応答的行動の因子分析は関係性攻撃2項目を除いて行い、関係性攻撃はこれとは別に単独で下位尺度を構成し、その信頼性を検討することとした。顕在性攻

撃（2種類）と主張行動（2種類）4変数について、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、固有値1以上の因子が2つ抽出された（固有値、第1因子1.77；第2因子1.43。累積寄与率、44.24%，80.03%）。2因子解を採用し因子の解釈を行った。

Table 4に示す様に、第1因子は「きつい言葉で責める」、「乱暴なことをする」という言語的攻撃と身体的攻撃に高い因子負荷量を示す因子で、「顕在性攻撃」と命名された。自分が近寄った時に皆が何も話さなくなる、挨拶したにも拘らず小声でささやき合って通り過ぎるなど、関係性攻撃被害の可能性があるとはいえ、行為者の意図は不明確である。これを考慮すると、この状況下できつく責める、暴力をふるうという行為は逸脱行動と言えよう。

第2因子は「自分が不快な気持ちになっていることを怒らずに伝える」、「どうして黙って話さないのか、怒らずに理由を聞く」という項目に高い負荷量を示す因子である。否定的な感情を抑制して、冷静に自分の不快感を伝える、行為の理由を尋ねて状況の理解に努める行動は、この場面の適切で穏当な行動と言える。よって、この因子は「主張行動」と命名した。

社会的情報処理と応答的行動については、中学・高校のサンプル別に同一の因子分析を実施したところ、いずれにおいても全サンプルで得られたのとはほぼ同様の因子パターンが得られたため、全体での分析結果に基づいて下位尺度の構成を行った。因子負荷量の絶対値が.30以上である変数を、各因子に対応する下位尺度の構成項目とした。負の因子負荷量を示した社会的情報処理の「攻撃反応」は得点化を逆転させた上で他の項目と合計した。応答的行動の関係性攻撃については、2種類×2場面の4項目による $\alpha$ 係数を算出した（Table 5）。怒り・敵意的情報処理と主張行動を除けば全ての下位尺度の $\alpha$ 係数は.70以上となり、高い信頼性が示された。

## 考察

本研究の第1の目的は、曖昧な関係性挑発場面に

Table 3  
社会的情報処理変数の探索的因子分析結果

	I	II	III
顕攻評2	<b>.77</b>	.00	-.03
顕攻評1	<b>.74</b>	.05	-.12
関攻評1	<b>.58</b>	.07	-.09
関攻評2	<b>.57</b>	.19	.03
顕攻評3	<b>.52</b>	-.09	.16
関攻評3	<b>.48</b>	.01	.18
大声	<b>.31</b>	-.05	.14
主評1	.20	<b>.76</b>	-.12
主評2	.15	<b>.75</b>	-.06
主評3	.07	<b>.57</b>	-.10
説明目標	-.09	<b>.56</b>	<b>.31</b>
攻撃反応	.22	<b>-.37</b>	.23
質問	-.09	<b>.33</b>	.07
SIP 怒	.05	-.01	<b>.68</b>
謝罪目標	.09	<b>.30</b>	<b>.60</b>
敵意帰属	-.12	-.07	<b>.58</b>
報復目標	.29	-.27	<b>.47</b>
SIP 悲	-.28	<b>.38</b>	<b>.44</b>
怒顔	.19	-.08	<b>.40</b>
FAC II	-.02		
FAC III	.21	.02	

Table 4  
応答的行動の因子分析

	FAC I	FAC II
顕在攻撃	.83	.14
応行乱暴	.71	-.17
理由	-.19	.69
不快伝達	.16	.80
因子間相関	FAC1	-.11



における中高生の社会的情報処理変数の因子パターンを明らかにすることであった。探索的因子分析の結果、SIP 攻撃評価、主張的情報処理、怒り・敵意的社会的情報処理の3因子が得られた。

SIP 攻撃評価は、曖昧な関係性挑発への応答としての顕在性攻撃と関係性攻撃に関する適切性と結果予期（関係維持目標、道具的目標）の観点からの評価がまとまった因子である。曖昧な関係性挑発は、挨拶を返さない、黙り込むというもので、あからさまに敵意を表出した排除や無視とも異なる。このような軽微な挑発場面では、報復として暴力をふるう、きつい言葉で応酬するといった顕在性攻撃は言うまでもなく、故意と決めつけて仕返しに無視し続ける関係性攻撃でさえも過剰で不適切と言える。従って、こうした行動によってもたらされる結果も、道具的目標であれ関係維持目標であれ、ともに否定的と判断されやすくなる。そのため、攻撃の種類や評価の観点により分化せず、一つの因子を構成したと思われる。この因子は攻撃行動についての子どもの知識構造を反映する因子とも考えられる。Huessman & Guerra (1997) は、攻撃行動の規範的信念 (normative belief) が児童期中期には「結晶化 (crystalized)」し、攻撃行動の始発を規定し始めると主張している。攻撃的な子どもは幼少時より、他者からの被害に直面した際、自分の行った攻撃行動がどのような結果につながるのか反復的に経験しており、それがひとまとまりの社会的知識を構成し、オンライン情報処理の第5ステップに反映されたと考えられる。ただし、このような因子の構成は、挑発場面の質やもたらされる被害の重篤度によってもある程度変動する可能性がある。例えば、桑原・濱口・江口・三鈺 (2008) の中学生を対象とした曖昧な道具的挑発場面の研究において、応答的な攻撃行動についての評価は、評価の内容（適切性、関係維持の結果予期、道具的結果予期）によって分かれ、道具的結果予期のみが独立した因子を構成し、他は別の情報処理の因子に組み込まれた。これは、物理的な被害を伴う場面では、攻撃の適切性の判断が、加害者の意図の判断によって左右され、攻撃行動の結果の予測が目標によって分化することを示すものである。以上の結果は、被害者に与えるダメージで大きく異なる場面では、評価ステップの社会的情報処理の構造が変化する可能性を示唆するものである。

主張的情報処理は、第3ステップの説明要請目標から、第4ステップの攻撃的反応検索の抑制や質問行動の検索の促進、そして第5ステップの主張行動（怒らずに理由を尋ねる）の評価（関係維持の結果予期、道具的結果予期、適切性評価）という複数の情

報処理ステップにまたがる因子である。第3因子の怒り・敵意的情報処理同様、複数のステップにまたがっており、主張行動を導き出す自動的な情報処理プロセスと言えよう。中学生を対象とした曖昧な道具的挑発場面における社会的情報処理を扱った桑原他 (2008) でも、同様の因子が抽出されており、仲間による挑発の種類を超えて一般性の高い情報処理の経路と考えられる。

怒り・敵意的社会的情報処理は、敵意帰属バイアス（第2ステップ）とそれに伴う感情、報復目標・謝罪目標（第3ステップ）といった、社会的情報処理の前半を中心として複数のステップにまたがる認知・感情的要因である。この因子は、自分は挨拶したのに相手は挨拶しない、あるいは自分が着席したらみな黙り込んでしまったという場面を、仲間が故意に自分を無視したと解釈することにより、怒り感情が喚起され、謝罪の要求と報復への動機づけが高まることを示す因子で、複数の処理ステップを貫く、自動化された処理の流れを示すものと考えられる。中学生を対象とした曖昧な道具的挑発場面における社会的情報処理の研究でも、敵意帰属バイアス、怒り、報復の目標を中心とした同様の因子が抽出されており（桑原他, 2008）、仲間による挑発の種類を超えて一般性の高い情報処理の経路と考えられる。

攻撃行動や主張行動へと導く複数の情報処理ステップを貫く上述の2因子の様な存在は、曖昧な道具的挑発場面において、小学校高学年でも（濱口, 2004）、中学生でも（桑原他, 2008）確認されている。これらの結果は、児童期後期から高校生の発達段階で、挑発場面において遂行される典型的な2つの行動—攻撃行動と主張行動—へと導く、ひとまとまりの情報処理の経路がすでに出来上がっていることを示唆している。Dodge & Pettit (2003) は、常習的な反社会的行動は、生物学的素因、社会的文脈、生活経験が双方向的に影響を与え合う無数の反復的な相互作用によって形成されるとしている。上述のステップ縦断的な情報処理の経路は、多くの被挑発経験における認知と行動の反復によって形成されたものと考えられる。

関係性挑発場面における応答的行動の因子分析は、行動の開始に時間的なずれのある関係性攻撃を除外して行った。その結果、言語的攻撃と身体的攻撃に高い負荷量を示す因子と、「理由の説明を求める」、「不快感の伝達」といった主張行動に高い因子負荷量を示す因子が抽出され、理論的に予測される結果となった。桑原他 (2008) では関係性攻撃の2項目も含めて因子分析が行われたが、そこでも、身体的攻撃、言語的攻撃と関係性攻撃からなる攻撃的

行動の因子と主張行動の2因子構造が確認されており、侵害行為の種類を超えて一貫性のある結果と思われる。

因子分析の結果に基づいて下位尺度を構成した結果、怒り・敵意的情報処理と主張行動を除けば全ての下位尺度の $\alpha$ 係数は.70以上となり、高い信頼性が示された。怒り・敵意的情報処理と主張行動はやや $\alpha$ 係数が低い、使用に耐える範囲と判断した。怒り・敵意的情報処理は項目の内容の多様性が、主張行動については項目数の少なさと2つの場面の相違のため信頼性が高まらなかったものと考えられる。

## 研究 2

### 目的

研究2では、(1)社会的情報処理と応答的行動の平均値における中学・高校間の差異を検討すること、(2)能動的・反応的攻撃性と曖昧な関係性挑発場面における社会的情報処理、関係性攻撃と顕在性攻撃ならびに主張行動との関連を、中学・高校間の差異を含めて検討することを目的とする。

社会的情報処理と応答的行動の中高間の平均値の差については、以下のことが予想される。高校生は中学生に比べて仲間を尊重する傾向が高まるため(榎本, 2000)、曖昧な関係性攻撃場面では、直ちに関係性攻撃と即断せず、意図を確認しようとするであろう。その為、まず説明を求め、否定的な感情の喚起を抑えて自分の感情や考えを伝える主張行動は中学より高校の方が高いであろう(仮説1-1)。そして、主張行動の肯定的評価等からなる主張的情報処理も中学より高校の方が高いであろう(仮説1-2)。一方、仲間との類似性・同一性を求める傾向の強い中学生にとっては、仲間による無視や拒否に晒されることは大きな脅威となり、自己防衛を図ろうとするだろう。その為、曖昧な関係性挑発場面では、中学生は高校生より、攻撃行動を多く行うであろう(仮説2-1)。さらに、敵意帰属バイアスと否定的な感情の喚起、報復目標を含んだ怒り・敵意的情報処理も高校より中学の方が高いであろう(仮説2-2)。

能動的・反応的攻撃性と曖昧な関係性挑発場面における中高生の社会的情報処理との関連、並びに社会的情報処理と関係性攻撃を含む応答的行動との関連を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行う。能動的・反応的攻撃性を第1水準に、社会的情報処理と感情の3因子を第2水準に、応答的行動を第3水準に配置する。応答的行動には、曖昧な関係性挑発場面に直面して直後に生じる顕在性攻撃と主張行動を含むモデル1と、一定時間経過後に

生じる関係性攻撃だけからなるモデル2の2つのモデルについて検証を行う。

第1水準から第2水準への関連についての仮説は下記の通りである。濱口・石川・三重野(2009)や濱口・藤原(2016)から、能動的攻撃性と反応的攻撃性の間には中程度の相関があることが知られているので、本研究でも両攻撃性間に相関を想定した。Dodge(1991)は、反応的攻撃は符号化・解釈といった情報処理の早期のステップの、能動的攻撃は攻撃行動への評価等、より後半の情報処理ステップにおける歪みによってもたらされるとしている。そこで、反応的攻撃性は敵意帰属や怒り等の変数を含む怒り・敵意的情報処理の因子と正の関連が予想される(仮説3-1a)。能動的攻撃性は、反応決定ステップの変数が多く含まれるSIP攻撃評価とは正の関連が予想される(仮説3-2a)、主張的情報処理は、目標の明確化→反応検索→反応評価の前半から後半にまたがる3ステップに亘って、攻撃行動と拮抗する主張行動の生成に導く情報処理の流れであるため、反応的攻撃性とは負の関連が(仮説3-1b)、能動的攻撃性とも負の関連が(仮説3-2b)予想される。なお、社会的情報処理の3変数は、同じ場面で働くオンラインの情報処理過程の構成要素であり、互いに関連しあうと考えられるため、誤差のすべての組み合わせ間に相関を想定した。

次に第2水準から第3水準への関連についての仮説は下記の通りである。第3水準は、分析1では身体的攻撃と言語的攻撃からなる顕在性攻撃と、質問と不快感の伝達からなる主張行動を、分析2では蔭口と無視といった関係性攻撃を従属変数として取り上げた。顕在性攻撃に対しては、怒り・敵意的情報処理とSIP攻撃評価が正の関連を示し(前者の関連、仮説3-3a、後者の関連仮説3-3b)、主張的情報処理が負の関連を示す(仮説3-3c)と予想される。関係性攻撃についても同じ関連性が予想される(仮説3-4a,b,c)。一方、主張行動に対しては、主張的情報処理は正の関連を(仮説3-5a)、怒り・敵意的情報処理並びにSIP攻撃評価は負の関連を示す(仮説3-5b,c)と予想される。分析1では顕在性攻撃と主張行動の間に関連があると予想されるので、誤差間に相関を想定した。

なお、以上の関連性について、中学・高校の学校段階差を検討するために多母集団同時分析を行う。社会的情報処理と行動との関連の強さについては、高校より中学で攻撃行動が多いことが予想されるため、怒り・敵意的情報処理と顕在性攻撃並びに関係性攻撃との正の関連は高校より中学の方が強いことが予想される(仮説4-1a,b)。SIP攻撃評価と顕在性

攻撃並びに関係性攻撃との間の正の関連も同様に、高校よりも中学が強いと予想される（仮説4-2a,b）。逆に主張行動は中学より高校で高いことが予想されるので、主張的情報処理と主張行動との正の関連は中学より高校で強くなり（仮説4-3a）、怒り・敵意情報処理並びに SIP 攻撃評価と主張行動との負の関連は中学より高校で強くなることが予想される（仮説4-3b,c）。

## 方法

### 1. 調査対象者：

対象者の構成は研究1と同じであるが、共分散構造分析を行うため、研究1のサンプル中、能動的・反応的攻撃性、社会的情報処理、応答的行動の全ての変数に亘って、欠損値がなかった454名（中学男子131名、中学女子137名、高校男子77名、女子109名）のデータを分析に使用した。

### 2. 調査内容・調査手続き：

研究1と同一であった。

## 結果

### 1. 学校段階差の検討

#### (1) 関係性挑発場面での社会的情報処理と応答的行動

曖昧な関係性挑発場面での社会的情報処理の3下位尺度と応答的行動の3下位尺度のそれぞれについて性別×学校段階の分散分析を行った。性別・学校段階ごとの記述統計と分散分析の結果を Table 5 に示す。

応答的行動では、3下位尺度全てで学校段階の主効果が有意となり、顕在性攻撃では高校より中学の方が高く、仮説2-1が支持された。主張行動と関係性攻撃では逆に中学より高校の方が高かった。主張行動については仮説1-1が支持されたが、関係性攻撃については仮説2-1が支持されなかった。また、顕在性攻撃では女子より男子が高く、主張行動では男子より女子が高かった。なお、顕在性攻撃では交互作用が有意となった ( $F(1,526) = 14.54, p < .001$ )。単純主効果の検定では、中学で性別の主効果が有意傾向 ( $F(1,281) = 3.17, p < .10$ ) で、女子より男子の方が高くなる傾向がみられ、高校では性別の主効果が有意となり ( $F(1,245) = 27.52, p < .001$ )、女子より男子が有意に高かった。また、性別ごとに学校段階差の単純主効果検定を行ったところ、男女ともに有意で（男子、 $F(1,249) = 9.87, p < .01$ ；女子、 $F(1,277) = 92.67, p < .001$ ）、いずれも高校より中学の方が高かった。

社会的情報処理では、SIP 攻撃評価と主張的情報

Table 5  
社会的情報処理・応答的行動測度の信頼性と学校段階×性別の分散分析結果および記述統計

変数名	α係数	最小値	最大値	全体			中学男子			中学女子			高校男子			高校女子			分散分析 ( <i>F</i> , <i>df</i> )		自由度		
				<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	学校段階差	性差			
SIP 攻撃評価	.78	15	61	507	31.02	7.30	138	32.60	7.29	145	30.31	6.20	98	32.57	6.99	126	28.90	8.08	1.26, ns	21.55***	女<男	1, 503	
主張の情報処理	.72	8	44	476	29.70	6.10	132	28.22	6.20	137	28.55	5.72	91	30.00	5.91	116	32.52	5.61	27.84***	中<高	6.81**	男<女	1, 472
怒り・敵意の情報処理	.66	12	52	525	35.41	6.42	138	35.54	7.07	145	36.45	5.39	111	34.70	5.98	131	34.73	6.98	5.16*	高<中	<i>F</i> <1, ns	1, 521	
顕在性攻撃行動	.73	4	20	530	9.24	3.18	138	10.52	2.20	145	10.07	2.08	113	9.31	3.82	134	6.95	3.25	74.89***	高<中	31.60***	女<男	1, 526
主張行動	.69	4	20	530	12.21	3.10	138	11.40	2.53	145	11.72	2.64	113	12.28	3.29	134	13.53	3.52	26.52***	中<高	8.93**	男<女	1, 526
関係性攻撃	.76	4	20	530	10.22	3.19	138	9.61	3.48	145	9.24	3.44	113	11.07	2.56	134	11.17	2.59	39.80***	中<高	<i>F</i> <1, ns	1, 526	

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

処理で性別の主効果が有意となり、SIP攻撃評価では女子より男子が高く、主張的情報処理では男子より女子が高くなった。主張的情報処理と怒り・敵意的情報処理で学校段階の主効果が有意となった。主張的情報処理は中学より高校の方が高く、仮説1-2が支持された。怒り・敵意的情報処理は高校より中学の方が高く、仮説2-2が支持された。なお、主張的情報処理では交互作用が有意となり ( $F(1,472) = 4.04$ ,  $p < .05$ )、単純主効果検定の結果、高校で性別の単純主効果が有意となり ( $F(1,205) = 9.79$ ,  $p < .01$ )、男子より女子が高かった。また男子で学校段階の単純主効果が有意となり ( $F(1,221) = 4.61$ ,  $p < .05$ )、中学より高校の方が高かった。女子でも学校段階の単純主効果が有意となり ( $F(1,251) = 30.79$ ,  $p < .001$ )、男子同様中学生より高校生の方が高かった。

## (2) 能動的・反応的攻撃性

能動的・反応的攻撃性6下位尺度のそれぞれについて、性別(男・女)×学校段階(中学・高校)の2要因分散分析を行った。学校段階×性別ごとの記述統計と分散分析の結果をTable 6に示す。報復意図、怒り、仲間支配欲求、攻撃肯定評価で性別の主効果が有意となり、怒りでは男子より女子が、他の3下位尺度ではいずれも女子より男子の方が高いことが明らかになった。攻撃有能感は有意傾向に留まった。また、欲求固執において学校段階の主効果が有意となり中学生より高校生の方が高かった。これらの性差は先行研究ともほぼ一致するものであった(濱口, 2005, 2007; 三鈷他, 2007)、しかしながら交互作用が欲求固執でのみ有意となり、単純効果検定の結果、高校で性別の単純主効果が有意となり ( $F(1,245) = 3.95$ ,  $p < .05$ )、女子より男子が有意に高いことが明らかにされた。また、男子において学校段階の単純主効果が有意となり ( $F(1,249) = 12.74$ ,  $p < .001$ )、中学より高校で高いことが明らかになった。欲求固執は中学生では学年の上昇に伴って高まることが知られているが(濱口, 2005b)、高校生男子でのみ特に高い本研究の結果が一般性のあるものかどうかはさらに今後の検討が必要である。

## 2. 能動的・反応的攻撃性と社会的情報処理および応答的行動との関連の検討

能動的・反応的攻撃性と曖昧な関係性挑発場面における中高生の社会的情報処理と応答的行動との関連を検討するために共分散構造分析によるパス解析を行った。特に中学と高校の学校段階差を検討するために、多母集団同時分析を行った。能動的・反応的攻撃性を第1水準に、社会的情報処理の3因子を第2水準に、応答的行動を第3水準に配置した。応答的行動には、関係性挑発場面に直面した時に生じ

Table 6  
本研究における能動的・反応的攻撃性尺度の信頼性ならびに学校段階×性別の分散分析結果と記述統計

	全体			中学男子			中学女子			高校男子			高校女子			分散分析 ( <i>F</i> , <i>p</i> , <i>df</i> )					
	α係数	<i>n</i>	自由度	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	性差	自由度				
報復意図	.88	530	7	28	16.83	5.49	138	17.63	5.61	145	16.62	5.34	113	17.64	5.23	134	15.55	5.54	1.25, <i>ns</i>	10.62*** : 女<男	1, 526
怒り	.76	529	5	20	11.41	3.65	137	10.75	3.39	145	11.60	3.68	113	11.15	3.48	134	12.11	3.90	2.07, <i>ns</i>	8.18*** : 男<女	1, 525
仲間支配欲求	.84	528	7	28	12.72	4.32	138	12.98	4.44	145	12.25	4.03	111	13.68	4.41	134	12.15	4.31	<i>F</i> <1, <i>ns</i>	9.09*** : 女<男	1, 524
攻撃有能感	.82	528	8	32	13.79	4.35	138	14.36	4.55	145	13.52	4.11	13.9	4.23	13.40	13.40	3.93	<i>F</i> <1, <i>ns</i>	3.17† : 女<男	1, 524	
欲求固執	.71	530	5	20	8.63	2.99	138	8.12	2.57	145	8.51	3.22	113	9.41	3.13	134	8.64	2.91	7.48*** : 中<高	<i>F</i> <1, <i>ns</i>	1, 526
攻撃肯定評価	.61	529	7	25	13.29	3.60	138	14.24	3.62	145	12.46	3.42	112	14.57	3.70	134	12.15	3.07	1.14, <i>ns</i>	48.46*** : 女<男	

†  $p < .10$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

る顕在性攻撃と主張行動の両方を含むモデル1と一定時間経過後に生じる関係性攻撃だけからなるモデル2との2つのモデルを想定して検証を行った。

#### (1) モデル1：顕在性攻撃と主張行動の共分散構造分析

まず母集団ごとの分析を行った。中学と高校でいずれも能動的攻撃性から主張的情報処理へのパスが有意とならなかったのをこれを削除して再度分析した結果、Figure 1のモデルの適合度は、中学でGFI=.938, AGFI=.880, CFI=.901, RMSEA=.084, 高校でGFI=.930, AGFI=.865, CFI=.915, RMSEA=.084となった。いずれにおいても少なくとも2つの適合度指標が許容可能な範囲にあるので、全てのパラメータに等値制約を置かず、多母集団同時分析を行ったところ、適合度指標は、GFI=.935, AGFI=.874, CFI=.907, RMSEA=.060, AIC=304.955となった。モデルは中学・高校に共通して良好な適合度であることがわかり、配置不変性が確認された。Figure 1に示してある中学・高校間に5%水準で有意差が見られた標準化係数と相関係数の全てに等値制約を置いたモデルを構成し、多母集団同時分析を行ったところ、適合度はGFI=.895, AGFI=.815, CFI=.807, RMSEA=.082, AIC=415.359となった。等値制約を置かなかった場合と比較して明確に適合度が悪化した。以上のことからモデルについては学校段階間で配置不変性はあるものの、パス係数の測定不変性は保証されないと言えよう。

第1水準の能動的・反応的攻撃性から社会的情報処理へのパスについて述べる。反応的攻撃性は怒

り・敵意情報処理に対して、能動的攻撃性はSIP攻撃評価に対して強い正の関連を示し、仮説3-1aと3-2aは支持された。これに加えて、反応的攻撃性は中高とも低いながらも負の有意な関連を主張的情報処理に対して示し、仮説3-1bが支持された。仮説3-2bは中高とも有意でなく、支持されなかった。

第2水準の社会的情報処理と第3水準の応答的行動とのパス係数の値には、中学と高校で少なからず相違が見られた。まず顕在性攻撃については、中学生では怒り・敵意的情報処理とSIP攻撃評価が正の有意な関連を示し、仮説3-3a, 3-3bが支持されたものの、仮説3-3cは支持されなかった。標準化係数の値はいずれも必ずしも高くはなく、決定係数も.26に留まることが示された。一方高校生の場合、決定係数が.46と大きく上昇した。中学の場合と同様に、怒り・敵意的情報処理が正の有意な関連を示し、仮説3-3aは支持された、SIP攻撃評価が正の有意な関連を示して仮説3-3bが支持され、同時に、SIP攻撃評価が中学より有意に強い関連を示し、攻撃行動への肯定的な評価が顕在性攻撃を強く規定することが明らかになった。これに加え、中学では有意でなかった主張的情報処理が高校では負の有意な関連を示し、仮説3-3cが支持された。以上より、特に高校生では冷静な主張行動を評価する認知が顕在性攻撃を抑制することが示された。

主張行動については、決定係数は中学・高校共に有意で、中学.22、高校.37と高校の方が高い値となった。主張的情報処理との間に正の関連が中高とも有意となり、仮説3-5aが支持された。ワルド検定の

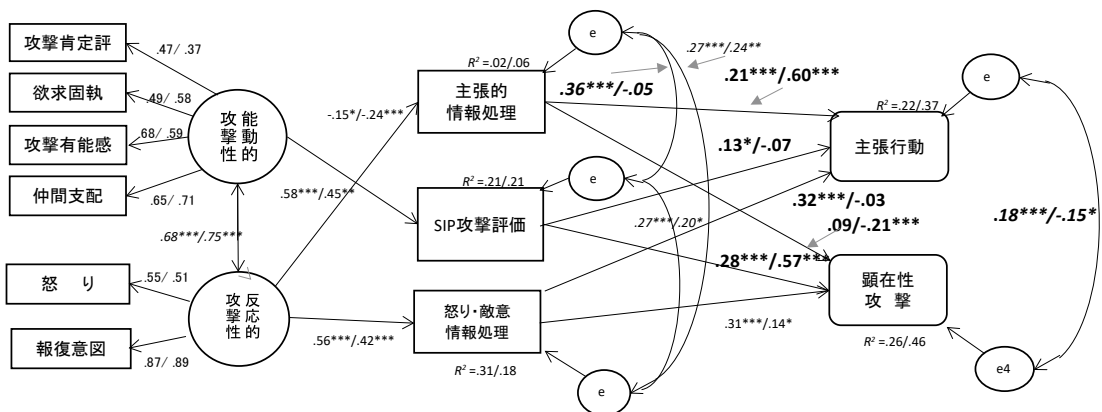


Figure 1. 能動的・反応的攻撃性と関係性挑発場面での社会的情報処理および応答的行動（主張行動・顕在性攻撃）のパス解析結果（中学・高校間多母集団同時分析）。

注) 図中の矢印につけられた数値は標準化係数。左が中学、右が高校。イタリックの数値は相関係数。双方向の矢印は相関。 $R^2$ は決定係数。大きいフォントの係数には中高で5%水準で有意差がある。相関係数と標準化係数のアスタリスクは有意水準。 $*p<.05$   $**p<.01$   $***p<.001$ 。太字は5%水準で中高間で有意差が見られた係数。能動的・反応的攻撃性の各下位尺度（観測変数）の誤差は省略した。

結果、この関連は中学より高校の方が有意に高いことが明らかになった ( $p < .001$ )。また、怒り・敵意的情報処理は中学で正の有意な関連を示したが、高校では有意な関連が見られなかった。仮説3-5bでは負の関連を予測したので、これらの結果は仮説を支持しない結果である。SIP 攻撃評価は中学では正の有意な関連が見られ、高校では有意な関連が見られなかった。ここでも、仮説3-5cは負の関連を予測したので、これらの結果は仮説を支持しなかった。

標準化係数の学校段階差を、ワルド検定によって検討したところ、怒り・敵意的情報処理と顕在性攻撃間では中高で有意差はなく、仮説4-1aは支持されなかった。また、SIP 攻撃評価と顕在性攻撃との関連は中学生より高校生の方が有意に強く、仮説4-2aとは逆の結果となった。

主張的情報処理と主張行動との関連は中学生より高校生の方が強く、仮説4-3aが支持された。しかし、怒り・敵意的情報処理と主張行動、並びに SIP 攻撃評価と主張行動との関連はいずれも高校生より中学生の方が有意に強い上に、負ではなく正の関連が見られ、仮説4-3bを支持しない結果となった。

なお、特に仮説は設けなかったが、観測変数相互、構成概念相互の相関についても中高で有意な差が見られた。中学生では応答的行動である主張行動と顕在性攻撃の間に低いながらも正の相関が見られたのに対して、高校生では逆に負の相関が見られた。高校生では攻撃行動と冷静な主張行動が相反する行動となっているのに、中学生ではむしろ類似性のある行動と位置づけられているように見受けられる。同様のことが社会的情報処理においても見られる。中学生では、主張的情報処理と SIP 攻撃評価との間に正の関連が見られたが、高校生ではそれは無相関であった。これは主張行動の評価と攻撃行動の評価が高校生に比べて中学生では未分化であることを示唆するものと推察される。

## (2) モデル2：関係性攻撃の共分散分析結果

最初に母集団ごとの分析を行った。分析1同様、中高で反応的攻撃性から主張的情報処理へのパスが有意でなかったのをこれを削除して再分析した。その結果、Figure 2 のモデルの適合度は、中学で  $GFI = .914$ ,  $AGFI = .832$ ,  $CFI = .849$ ,  $RMSEA = .114$ , 高校で  $GFI = .928$ ,  $AGFI = .858$ ,  $CFI = .873$ ,  $RMSEA = .095$  となった。中学で  $GFI$  が、高校で  $GFI$  と  $RMSEA$  が許容可能な範囲の適合度を示したので、全てのパラメータに等値制約を置かずに多母集団同時分析を行ったところ、適合度指標は、 $GFI = .920$ ,  $AGFI = .842$ ,  $CFI = .858$ ,  $RMSEA = .075$ ,  $AIC = 307.958$  となった。 $GFI$  と  $RMSEA$  は許容可能な範囲の適合度

を示したので、中学と高校において5%水準で有意差が見られた標準化係数と相関係数の全てに等値制約を設定したモデルを構成し、多母集団同時分析を行った。その結果、適合度は  $GFI = .903$ ,  $AGFI = .821$ ,  $CFI = .810$ ,  $RMSEA = .084$ ,  $AIC = 352.122$  となり、等値制約を置かなかったモデルよりも全ての適合度指標が悪化した。以上により、等値制約を置かない配置不変モデルを採択することとした。

個々の標準化係数や相関係数を Figure 2 に示す。能動的・反応的攻撃性と社会的情報処理各変数との間の標準化係数、能動的攻撃性と反応的攻撃性ならびに社会的情報処理3変数相互間の相関係数は分析1と全く同じであった。社会的情報処理と関係性攻撃との関連については以下の通りであった。中学では怒り・敵意的情報処理と SIP 攻撃評価が正の有意な関連を示すとともに、主張的情報処理が負の有意な関連を示し、仮説3-4a,b,c が全て支持された。標準化係数の絶対値も .28~.41 と比較的大きく、中でも怒り・敵意的情報処理の影響力の強さが目立った。高校では、怒り・敵意的情報処理並びに SIP 攻撃評価と関係性攻撃との間に有意な正の関連が見られ、仮説3-4a と 3-4b が支持された。しかし、主張的情報処理の関係性攻撃への関連は有意とならず、仮説3-4c は支持されなかった。ワルド検定により標準化係数を中学生と高校生とで比較したところ、怒り・敵意的情報処理並びに SIP 攻撃評価の正の有意な関連は中学生に比べて高校生が有意に低い値に留まることが明らかにされた。これは仮説4-1b, 4-2b を支持する結果である。その結果、関係性攻撃に対する決定係数も中学生では .35 であるのに対して高校生では .19 に留まった。

## 考察

研究2では、関係性挑発場面での応答的行動と社会的情報処理の学校段階の差を検討することが第1の目的とされた。分散分析の結果、主張行動(説明要請と不快感の伝達)と主張的情報処理において中学生より高校生の方が高いことが明らかになり、仮説1-1と1-2が支持された。高校生は中学生よりも相手の意思を尊重する傾向が強いので(榎本, 2000)、仲間の意図がよくわからないまま無視されたように感じられる場面では、一方的に悪意に決めつけたりせず、まず、仲間にその行為の意図を尋ね、確認しようとするのであろう。そのことが、説明目標の設定、攻撃的行動の産出の抑制と質問行動の産出促進、主張行動に対する高い評価といった主張的情報処理をもたらし、主張行動が行いやすくなるものと思われる。



顕在性攻撃と怒り・敵意的情報処理において高校生より中学生で高いことが明らかとなり、仮説2-1、2-2 が支持された。榎本（2000）の青年期の対人欲求・感情の発達の変化を踏まえると、中学生は高校生よりも仲間との類似性・同一性を求めるために、相手から無視される関係性挑発場面は、より脅威的に知覚されやすいと考えられる。そのために高校生より中学生において、この場面についての敵意的解釈、怒りの喚起、謝罪や報復の目標設定といった怒り・敵意的情報処理を行いやすく、結果として直接的攻撃である顕在性攻撃が高くなるものと推察される。ところで、予想に反して関係性攻撃はむしろ高校生の方が高かった。本研究では関係性攻撃として陰口とともに無視を用いた。仲間から話しかけられない、挨拶を返してもらえない等といった経験をした後に、その仲間たちに対して無視をするという応答行動は、報復としての攻撃行動というより、「あなたとは関わりたくない」という仲間の意図を付度して、自分から距離を置くという抑制的・回避的対応としても解釈できる。そのため、相手の意図を尊重しやすい高校生の方が高くなったのかもしれない。この点は関係性攻撃の種類を変えて更に検討が必要であろう。

上述の諸結果は、青年期の大脳の発達の変化によっても説明可能かもしれない。Fung, Raine, & Gao (2009) は青年期を通じて前頭皮質が成熟するため、挑発によって自動的に引き起こされる辺縁系起源の情動的反応に対する神経生理学的調整が強まると主

張している。これに従えば、関係性挑発によって引き起こされた否定的な感情の調整は中学生よりも高校生の方が長けており、そのため、より感情的な怒り・敵意的情報処理や顕在性攻撃が中学生で高く、より冷静な主張的情報処理と主張行動が高校生で高くなると言えよう。

次に能動的・反応的攻撃性、社会的情報処理、応答的行動に至るモデルについて考察する。

モデルには、関係性挑発直後に生起する主張行動と顕在性攻撃に関するモデル1と、関係性挑発から少し時間が経過した後に生起する関係性攻撃に関するモデル2の2つがあった。いずれのモデルでも、中学生と高校生の母集団別の分析で、能動的攻撃性から主張的情報処理へのパスが有意にならず、仮説3-2b が支持されなかった。能動的攻撃性は、利己的な欲望のために他者を支配し、傷つけることを厭わない内的特性で、本来、物理的・社会的な利益の獲得・維持が課題となる場面で、利己的で攻撃的な行動を導くものである。本研究の曖昧な関係性挑発場面は、挨拶を返してもらえない、自分が来たために皆が沈黙してしまうという場面であり、何らかの報酬を獲得する誘因に乏しい場面である。そのため単に説明を求めたり、自己の不快感を伝えるといった、報酬獲得という性格の薄いこの種の主張行動と、その主張行動をもたらす一連の情報処理と能動的攻撃性とは有意な関連が見られなかったと考えられる。

モデル1もモデル2も、能動的攻撃性から主張的

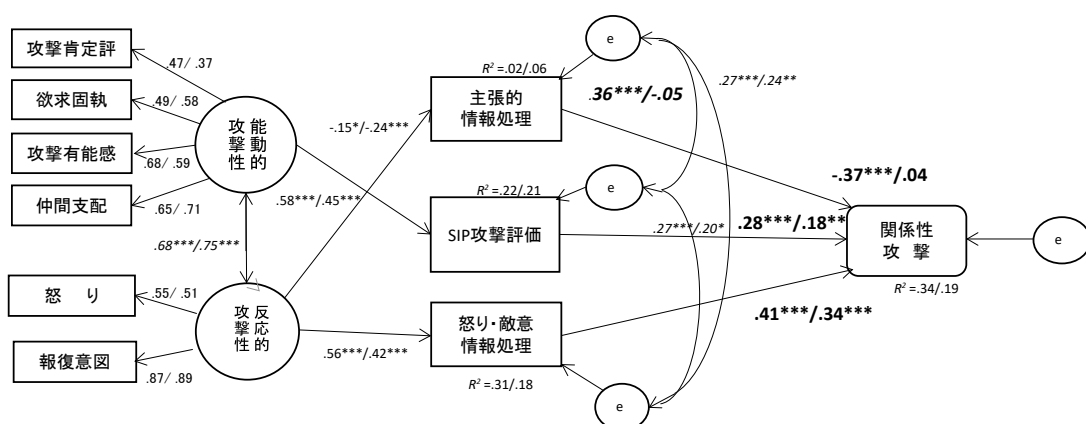


Figure 2. 能動的・反応的攻撃性と関係性挑発場面での社会的情報処理および応答的行動（関係性攻撃）のパス解析結果（中学・高校間多母集団同時分析）。

注) 図中の矢印につけられた数値は標準化係数。左が中学、右が高校。イタリックの数値は相関係数。双方向の矢印は相関。 $R^2$ は決定係数。大きいフォントの係数には中高で5%水準で有意差がある。相関係数と標準化係数のアスタリスクは有意水準。 $*p<.05$   $**p<.01$   $***p<.001$ 。太字は5%水準で中高間で有意差が見られた係数。能動的・反応的攻撃性の各下位尺度（観測変数）の誤差は省略した。

情報処理へのパスを削除して、等値制約を設けず学校段階による多母集団同時分析を行ったところ、CFIとRSMEAで良好な適合度が得られ、中学生でも高校生でもまずまず適合しているモデルであることが明らかになった。しかしパス係数に等値制約を設けたモデルの適合度が悪化したので、予測した通り、中学・高校間でパス係数の値に有意差がある可能性が示された。

第1水準のパスについて考察を加える。以下の部分ではモデル1, 2の結果を合わせて扱う。予想された通り、反応的攻撃性は怒り・敵意的情報処理を強く促進し、主張的情報処理を抑制することが明らかにされ、仮説3-1aと3-1bが支持された。Dodge & Coie (1987) や Dodge (1991) では、反応的攻撃の高さは情報処理の前半部分の歪み・偏りと関連があると主張しているが、本研究でも、反応的攻撃性は敵意帰属や報復・謝罪を求める目標設定という前半部の情報処理の歪みと関連があることが示された。また、主張的情報処理は主張行動についての評価を中心とした社会的情報処理変数であるが、怒りと報復意図と拮抗する内容であることから負の関連が見られたと言えよう。一方、能動的攻撃性は中学生・高校生ともにSIP攻撃評価を促進することが明らかにされ仮説3-2aが支持された。SIP攻撃評価は社会的情報処理の第5ステップに属する変数が多く、ここでもDodge & Coie (1987) や Dodge (1991) の能動的攻撃の高さは情報処理の後半部分の歪み・偏りと関連があるという主張と一致する結果となった。

第2水準のパスについて考察を加える。怒り・敵意的情報処理から顕在性攻撃並びに関係性攻撃への正のパスは予想された通り中・高ともに有意となり、仮説3-3a, 3-4aが支持された。顕在性攻撃においては中高間で有意差はなく、仮説4-1aは支持されなかったが、関係性攻撃においてはパス係数の値は高校生より中学生の方が高く、仮説4-1bが支持された。怒り・敵意的情報処理は特に中学生において関係性攻撃を強く規定する社会認知的・情緒的要因であると言えよう。また、SIP攻撃評価から顕在性攻撃並びに関係性攻撃への正のパスも中学・高校ともに有意となり、仮説3-3b, 3-4bが支持された。パス係数の値は関係性攻撃では高校生より中学生の方が有意に高く、仮説4-2bが支持された。しかし顕在性攻撃では逆に中学生より高校生の方が高く、仮説4-2aは支持されなかった。これは何故だろうか？ 上述の結果は、曖昧な関係性挑発を受けた場面では、顕在性攻撃は、中学生では怒り・敵意的情報処理というホットな内部プロセス（反応的攻撃性の影響を強く受けている）の影響が強く、年齢の高い高

校生では、攻撃行動の適切性の判断や結果予測に基づく冷静ではあるが歪んだ意思決定によって規定される度合いが強くなることを示している。先述したFung, et al. (2009) では、香港の11歳から15歳の男女生徒において、青年期を通じて前頭皮質が成熟するため、反応的攻撃が年齢に伴って増加しないことを見出した。本研究で、怒り・敵意的情報処理への顕在性攻撃の影響が中学生で高く、高校生で弱まるのは、前頭皮質の成熟に伴う否定的情動の制御の発達のためと考えられる。本研究のSIP攻撃評価は能動的攻撃性の影響を比較的強く受けているが、Fung et al. (2009) では、能動的攻撃は青年期を通じて年齢の増加に伴って上昇することが示されている。中学生より高校生でSIP攻撃評価の顕在性攻撃に対する影響が強く働くようになるのは、高校生で能動的攻撃が上昇することを反映しているのかもしれない。仲間による曖昧な関係性挑発という同じ場面における応答的な顕在性攻撃行動でも、中学生と高校生とではそれを支える内的プロセスが異なり、中学生では反応的攻撃の特徴が、高校生では能動的攻撃の特徴がより強く表れることが示唆された。

主張的情報処理は高校生においてのみ、顕在性攻撃に有意な負のパスを示した。仮説3-3cは高校生のみ支持された。中学生では応答的行動としての主張行動と顕在性攻撃の間に正の相関がみられたように、両行動間の弁別が不十分で、両立しない代替的行動と十分認識されておらず、主張行動を導く主張的情報処理はまだ顕在性攻撃を抑制する要因にはなっていない。しかしながら、高校生では主張行動と顕在性攻撃の間に負の相関がみられるようになり、その結果、主張的情報処理が顕在性攻撃を抑制するようになるものと考えられる。関係性攻撃に対しては、主張的情報処理が負の有意な関連を示したのは中学生のみで、仮説3-4cは中学生だけで支持された。高校生で支持されなかった理由は不明だが、応答的行動としての関係性攻撃の平均値が高校の方が高いことから、曖昧な関係性挑発を受けた場合、その様な行為をする仲間とは、親密な関わりを避け、距離を取ろうとするためではないかと思われる。

主張行動に対しては、予想通り、中学生でも高校生でも主張的情報処理が正のパスを示し、仮説3-5aが支持された。パス係数の値は中学生より高校生の方が高く、仮説4-3aが支持された。主張行動と主張的情報処理は平均値も高校生の方が高く、両者の関連性も高校の方が強くなる。Fung et al. (2009) は、反応的攻撃が青年期を通じて増加しないもうひとつの理由として、前頭皮質の成熟により、葛藤に対す



る非攻撃的な解決方略の使用の柔軟性が増大することを挙げている。本研究で上げた2つの主張行動は、曖昧な関係性挑発場面での非攻撃的で適応的な葛藤解決方略と言え、高校生において主張行動とそれを支える情報処理プロセスが高まることは、こうした青年期における脳の発達に基礎を置く変化と言えるかもしれない。怒り・敵意的情報処理とSIP攻撃評価は、中学生で予測に反して主張行動と正の関連が見られ、高校生では有意な関連が見られず、仮説3-5b、3-5c、仮説4-3b、4-3cはいずれも支持されなかった。中学生で正のパスが有意となったのは、先述したように、中学生では顕在性攻撃と主張行動の分化が十分ではなかったためと考えられる。高校生で怒り・敵意的情報処理もSIP攻撃評価も主張行動と有意な関連が見られなかったが、中学生よりは高校生で顕在性攻撃との分化が進んだ結果とも解釈できる。負の関連が見られるようになるのは、もう少し年齢が上昇した大学生になる頃になるのかもしれない。

## 総合的討論

### (1) 本研究のまとめ

本研究は青年期前期と中期に当たる中学生・高校生を対象に、①曖昧な関係性挑発場面における社会的情報処理の因子構造を明らかにすること(研究1)、②関係性攻撃を中心に、顕在性攻撃並びに主張行動の生起プロセスを、能動的・反応的攻撃性と社会的情報処理の観点から明らかにすること(研究2)、③この生起プロセスの中学生と高校生の差異を明らかにすること(研究2)を目的として、場面想定法による質問紙調査を実施した。

研究1では、530名の中・高生のデータを分析したところ、曖昧な関係性挑発場面における社会的情報処理は、怒り・敵意的情報処理、主張的情報処理というステップ縦断的情報処理の因子と、SIP攻撃評価という第5ステップに特化した因子からなることが明らかにされた。

研究2では曖昧な関係性挑発場面での社会的情報処理と応答的行動の学校段階差の検討と、攻撃性・社会的情報処理・応答的行動との関連の検討が行われた。

社会的情報処理と応答的行動の学校段階差については、仮説通り、主張行動と主張的情報処理は中学生より高校生の方が高く(仮説1-1、1-2)、顕在的攻撃と怒り・敵意的情報処理は高校生よりも中学生の方が高かった(仮説2-1、2-2)。関係性攻撃が高校生の方が高いことは再検討の余地があるが、高校生の

方が中学生より、曖昧な関係性挑発を攻撃と即断して報復的に対応せず、意図を確認し、否定的感情を抑制して自分の感情や考えを伝える傾向が強くなることが明らかにされた。

攻撃性・社会的情報処理・応答的行動の因果モデルについては、仮説通り下記の結果が得られた。①反応的攻撃性は怒り・敵意的情報処理と正の関連があり(仮説3-1a)、②主張的情報処理と負の関連がある(仮説3-1b)。③能動的攻撃性はSIP攻撃評価と正の関連がある(仮説3-2a)。顕在性攻撃に対しては、④怒り・敵意的情報処理(仮説3-3a)と、⑤SIP攻撃評価が正の関連を示し(仮説3-3b)、関係性攻撃に関しても、⑥怒り・敵意的情報処理(仮説3-4a)と、⑦SIP攻撃評価が正の関連を示す(仮説3-4b)。主張的情報処理から2つの攻撃行動への負の関連は、⑧顕在性攻撃については高校生のみ(仮説3-3c)、⑨関係性攻撃については中学生のみで有意となった(仮説3-4c)。また主張行動に対しては、⑩主張的情報処理が正の関連を示した(仮説3-5a)。

因果モデルからは、曖昧な関係性挑発場面において、反応的攻撃性は怒り・敵意情報処理を促進し、顕在性攻撃と関係性攻撃を促進する一方、主張的情報処理と、主張行動を抑制すること、能動的攻撃性はSIP攻撃評価を促進し、顕在性攻撃と関係性攻撃をともに促進することが読み取れる。特に中学生の場合、怒り・敵意的情報処理とSIP攻撃評価という2つの情報処理因子と関係性攻撃との関連が強く、関係性攻撃の遂行に対して、反応的攻撃性と能動的攻撃性という攻撃的パーソナリティの影響を強く受けやすいことは留意すべきであろう。一方、高校生においては、主張行動は顕在性攻撃と負の関連を示す様になり、顕在性攻撃と両立しにくい適応的行動として機能し始める。同時に、主張的情報処理から主張行動への関連も中学から高校にかけて大きくなるため、主張的情報処理を高めて主張行動を促進することは、曖昧な関係性挑発場面での顕在性攻撃の抑制にとって重要になる。それだけに、主張的情報処理を抑制する反応的攻撃性の高さが、高校生でみられる場合、中学生時よりも大きなマイナスになりやすいことにも留意すべきであろう。

### (2) 本研究の限界

本研究には方法論上の限界がある。まず、曖昧な関係性挑発場面における行動の測定法である。本研究では質問紙によって測定しており、現実の行動をどの程度反映しているかは検討の余地がある。倫理面やコストの課題はあるが仲間評定やアナログ場面での行動観察等の測度を用いて検討する必要がある

だろう。第2には能動的・反応的攻撃性と、社会的情報処理並びに応答的行動を同一時点で測定していることである。特に能動的・反応的攻撃性は社会的情報処理・応答的行動の先行要因として位置づけられているので、因果関係を検証するためには、縦断的研究デザインで、社会的情報処理と応答的行動よりも前の時点で測定されるべきである。本研究では攻撃性と社会的情報処理との間に比較的強い関連性が見られたが、これは同時点での測定によってやや強められている可能性がある。最後に性差の扱いについてである。能動的・反応的攻撃性、社会的情報処理、応答的行動の全てにわたり、尺度得点の平均値には多くの性差が検出されていた。しかし本研究では、性差については十分な考察を加えることができなかった。また、能動的・反応的攻撃性・社会的情報処理・応答的行動の関連についての性差も未検討である。今後は、今回検証された因果モデルを性別による多母集団同時分析で検証する必要がある。

### (3) 青年期における曖昧な関係性挑発場面における応答的行動の制御に関する本研究の発達臨床心理学的含意

本研究の主な狙いは、日本の青年のいじめの主要な手口である関係性攻撃の生起メカニズムの解明と制御のための指針を得ることであった。Dodge & Jeniffer (2013) は、攻撃的なハイリスク児とその保護者を対象として小学1年時から中学3年時にかけて行われた大規模・長期の心理学的介入プログラム(Fast Track)の効果が27%が、敵意帰属バイアス、有能な反応の生成率、攻撃行動への評価といった3種類の社会的情報処理変数の改善によってもたらされていることを示した。これは小学生の時期に上述の社会的情報処理3変数が改善されると、青年期初期の反社会的傾向が大幅に減少することを、長期間の介入研究で実証した強力なエビデンスである。青年の場合にはどのような要因への介入が有望なのだろうか？

本研究で特に注目したのは、関係性攻撃を中心に、曖昧な関係性挑発によって引き起こされる応答的行動の生起プロセスであった。関係性攻撃と顕在性攻撃の生起には、反応的攻撃性→怒り・敵意的情報処理→関係性(顕在性)攻撃という経路と、能動的攻撃性→SIP攻撃評価→関係性(顕在性)攻撃という2つの経路が強く機能していることがわかった。これらに加えて、主張的情報処理も重要で、中・高生でともに、適応的な主張行動を促進するだけでなく、中学生では関係性攻撃を、高校生では顕在性攻撃を抑制する機能をそれぞれ持つことが明らかに

された。以上を踏まえると、関係性攻撃を始めとして、曖昧な関係性挑発場面での中学生・高校生の応答的行動への心理臨床的介入のポイントは以下の3点となる。①怒り・敵意的情報処理とSIP攻撃評価を低め、曖昧な関係性挑発に直面した際にこれらの情報処理の機能を不活性化すること、②主張的情報処理を高め、曖昧な関係性挑発に直面した際に、その機能を活性化すること、③反応的攻撃性・能動的攻撃性を適正水準に低下させること。これらの内、①と②は曖昧な関係性挑発場面に特異的な認知・情緒メカニズムへの介入であるが、③はより広範な状況に亘って作用する基盤的な内的機能への介入であることに留意すべきである。効果的な介入は、①②に対応する関係性挑発場面特異的な認知・情緒・行動面へのアプローチと、③に対応する場面非特異的で基盤的機能へのアプローチを並行して行うことであろう。

場面特異的な社会的情報処理の適正化については、架空の関係性挑発場面を提示しながら、怒り・敵意的情報処理と主張的情報処理を構成する認知・情緒的スキルを適正化し、強化する取り組みが有効であろう。これらには、挑発場面における手がかり使用の適正化を含む敵意帰属傾向の修正(Hudley & Graham, 1993)、リラクセーション手続きと自己教示の導入による怒りコントロール(Glick & Gibbs, 2011)、衝動的な対人目標設定の抑制(Rabiner, Lenhart, & Lochman, 1990)、関係維持の目標と道具的目標の統合(Rabiner & Gordon, 1992)、友好的・主張的な代替の方略の産出と実演(Richard & Dodge, 1982)、道徳推論(Glick & Gibbs, 2011)などが考えられる。

一方、青年の攻撃的なパーソナリティの変容については、心理面のみならず、生物学的・社会的要因への働きかけも含めた取り組みが有望であろう。

青年本人への働きかけとしては、攻撃的行動傾向に関与する脳のメカニズムに直接働きかける生物学的アプローチの有効性が近年唱道されている。例えば、集中的なニューロフィードバック訓練による前頭皮質の活性化(Surmeli & Edem, 2009)、マインドフルネス瞑想法による情動統制力の向上と(Robins, Keng, Ekblad, & Brantley, 2012)、大脳の機能的・構造的変化(Lazar et al., 2005)、オメガ3脂肪酸を含有する食物の長期間の摂取による神経細胞の強化などである(Raine, Portnoy, Liu, Mahoomed, & Hibbeln, 2015)。

これに加えて、青年を取り巻く日常生活環境を、安全で、公正な秩序のある、向社会的な環境に変え、青年を心ある大人達が監督する様々な活動に

従事させ、豊かな生活経験を積み重ね、長期に亘って、向社会的なパーソナリティを形成できるよう青年を導くことも重要である。これには、家庭、学校、地域社会が行う多様な取り組みが考えられる。例えば、いじめ予防教育など学校での取り組み (Olweus & Limber, 2010; Smith, Sharp, Eslea, & Thompson, 2004)、ペアレント・トレーニング等による家庭での親の養育行動や親子間のコミュニケーションの適正化 (Kazdin, 2005)、他にも地域の行事の運営やボランティア活動への参加等が考えられる。なお、最近ではインターネットや携帯電話を用いたサイバー攻撃 (cyber aggression) が若者を中心に急速に広がっており (Porani & Wood, 2010)、インターネット・リテラシー教育の取り組みも必要である。本研究では、高校生は中学生より関係性攻撃の平均値は高いことがわかった。リアルライフでの関係性攻撃とネット上でのいじめには正の相関があるため (内海, 2010)、曖昧な関係性挑発場面に誘発されて関係性攻撃を行う高校生には、相当数サイバー空間中でも攻撃的に振舞う者が存在すると思われる。今後は関係性挑発場面への応答的行動の中にサイバー攻撃も含めて検討すべきであろう。

## 付 記

本研究の調査にご協力いただきました茨城県南部の中学校・高等学校の生徒の皆さんと先生方に深く感謝いたします。

研究の公表に際しては桑原千明さん (文教大学) にご協力いただきました。また、反応検索ステップの自由記述データの評定には、金子楓さん、廣瀬愛希子さん (筑波大学大学院人間総合科学研究科) にご協力いただきました。ご協力ありがとうございました。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 C, 課題番号17530500, 「青年期における能動的攻撃性・反応的攻撃性の発達臨床心理学的研究」) の助成を受けた。

本研究の一部は、日本教育心理学会第50回総会 (東京学芸大学) において公表された。

## 引用文献

- Arsenio, W. F., & Lemrise, E. A. (2004). Agression and moral development: Integrating social information processing and moral domain models. *Child Development*, 75, 987-1002.
- Barry, C. T., Pickard, J. D., & Ansel, P. L. (2009). The

- associations of adolescent invulnerability and narcissism with problem behaviors. *Personality and Individual Differences*, 47, 577-582.
- Carroll, J., Nelson, D. A., Yorgason, J. B., Haper, J. M. Hagmann, R., & Jensen, A. C. (2010). Relational aggression in marriage. *Aggressive Behavior*, 36, 315-329.
- Coyne, S. (2015). Effects of viewing relational aggression on television on aggressive behavior in adolescents: A three-year longitudinal study. *Developmental Psychology*, 52, 284-295.
- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocative type. *Developmental Psychopathology*, 7, 313-322.
- Crick, N. R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Crick, N. R., Murray-Close, D., & Woods, K. (2005). Borderline personality features in childhood: A short-term longitudinal study. *Developmental Psychopathology*, 17, 1051-1070.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 131-142.
- Crick, N. R., & Werner, N. E. (1998). Response decision process in relational and overt aggression. *Child Development*, 69, 1630-1639.
- Dane, A. V., & Marini, Z. A. (2014). Overt and relational forms of reactive aggression in adolescents: Relations with temperamental reactivity and self-regulation. *Personality and Individual Differences*, 60, 60-66.
- Deluty, R. H. (1979). Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness, assertiveness and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1061-1071.

- Dodge, K. A. (1991). The structure and function of reactive and proactive aggression. In D. J. Pepler & K. H. Rubin, (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp.201-218). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158.
- Dodge, K. E., & Jennifer, G. (2013). Social information-processing patterns mediate the impact of preventive intervention on adolescent antisocial behavior. *Psychological Science*, 24, 456-465.
- Dodge, K. A., Lansford, J. E., Burks, V. S., Bates, J. E., Pettit, G. S., Fontaine, R., et al. (2003). Peer rejection and social information processing factors in the development of aggressive behavior problems in children. *Child Development*, 74, 374-393.
- Dodge, K. A., & Pettit, G. S. (2003). A biopsychosocial model of the development of chronic conduct problems in adolescence. *Developmental Psychology*, 39, 349-371
- Dodge, K. A., Pettit, G. S., & McClaskey, C. L., & Brown, M. M. (1986). Social competence in children. *Monographs of Society for Research in Child Development*, serial No. 213, Vol.51, No.2, 1-79.
- Ellis, W., Chung-Hall, J., & Duma, T. M. (2013). The role of peer group aggression in predicting adolescent dating violence and relationship quality. *Journal of Youth & Adolescence*, 42, 487-499.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. *教育心理学*, 48, 444-453.
- Feshbach, S. (1964). The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, 71, 257-272.
- Fung, A. L., Raine, A. R., & Gao, Y. (2009). Cross-cultural generalizability of the Reactive-Proactive Aggression Questionnaire (RPQ). *Journal of Personality Assessment*, 91, 473-479, 2009
- Gleason, K. A., Jensen-Campbell, L. A. & Richardson, D. S. (2004). Agreeableness as a predictor of aggression in adolescence, *Aggressive Behavior*, 30, 43-61.
- Glick, B., & Gibbs, J. C. (2011). Aggression replacement training: A comprehensive intervention for aggressive youth(3rd edition-revised and expanded). Champaign, Illinois U.S.A.: Research Press.
- Goldstein, S., & Tisak, M. S. (2004). Adolescents' outcome expectancies about relational aggression within acquaintanceships, friendships, and dating relationships. *Journal of Adolescence*, 27, 283-302.
- Grotzinger, J. K., & Crick, N.R. (1996). Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, 67, 2328-2338.
- 濱口佳和 (2002). 第3章 攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学——発達・教育編—— (pp.40-59). ナカニシヤ出版
- 濱口佳和 (2004). 挑発場面における児童の社会的コンピテンス 風間書房
- 濱口佳和 (2005a). 能動的攻撃・反応的攻撃の概念定義と測定法に関する考察——青年期における能動的・反応的攻撃の個人差測定尺度開発に向けて—— *教育相談研究*, 43, 27-36.
- 濱口佳和 (2005b). 自記式能動的攻撃性尺度 (中学生用) の構成 *カウンセリング研究*, 38, 183-194.
- 濱口佳和 (2007). 自記式反応的攻撃性尺度 (中学生用) の構成 *カウンセリング研究*, 40, 136-145.
- 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連——2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連—— *教育心理学研究*,
- 濱口佳和・藤原健志 (2016). 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究——尺度構成, 2種類の攻撃行動との関連ならびに下位類型の検討—— *教育心理学研究*, 64, 59-75.
- 濱口佳和 (2017). 大学生の能動的・反応的攻撃性に関する研究——尺度構成と攻撃的行動傾向との関連の検討—— *教育心理学研究*, 65, 248-264.
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 *心理学研究*, 61, 227-234.
- 平木典子 (2000). 自己カウンセリングとアサーションのすすめ 金子書房
- Hudley, C., & Graham, S. (1993). An attributional intervention to reduce peer-directed aggression among African-American boys. *Child Development*, 64, 124-138.
- Huesmann, L. R., & Guerra, N. G. (1997). Children's normative beliefs about aggression and aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 408-419.

- Juliano, M., Werner, R. S., & Cassidi, K. W. (2006). Early correlates of preschool aggressive behavior according to type of aggression and measurement. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 27, 390-415.
- 河端良人 (2015). 認知のゆがみを説明する諸理論 (包括的レビュー) 吉澤寛之・大西彩子・G. ジニ・吉田俊和 (編著) ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動：その予防と改善の可能性 (pp. 21-37) 北大路書房
- Kawabata, Y., Crick, N. R., & Hamaguchi, Y., (2010). Forms of aggression, social-psychological adjustment, and peer victimization in a Japanese sample. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 38, 471-484.
- Kawabata, Y., Alink, L. R. A., Tseng, W., van Ijzendoorn, M. H., & Crick, N. R. (2011). Maternal and paternal parenting styles associated with relational aggression in children and adolescents: A conceptual analysis and meta-analytic review. *Developmental Review*, 31, 240-278.
- Kazdin, A. E. (2005). *Parent management training: Treatment for oppositional, aggressive, and antisocial behavior in children and adolescents*. Oxford, U.K.: Oxford University Press
- Kokinos, C. M., & Voulgaridou, I., (2017). Relational and cyber aggression among adolescents: Personality and emotion regulation as moderators. *Computers in Human Behavior*, 68, 528-537.
- Kokinos, C. M., Voulgaridou, I., & Marcos, A. (2016). Personality and relational aggression: Moral disengagement and friendship quality as mediators. *Personality and Individual Differences*, 95, 74-79.
- Krahé, B., & Busching, R. (2014). Interplay of normative beliefs and behavior in developmental patterns of physical and relational aggression in adolescence: A four-wave longitudinal study. *Frontiers in Psychology*, 5, Article 1146.
- 桑原千明・濱口佳和・江口めぐみ・三銘泰代 (2008). 中学生の能動的・反応的攻撃性と道具的挑発場面における社会的情報処理ならびに応答的行動との関連 (1) ——社会的情報処理変数および応答的行動の因子構造の検討—— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 115.
- Lansford, J. E., Malone, P. S., Dodge, K.A. Croizier, J., Pettit, G. S., & Bates, J. E. (2006). A 12-year prospective study of patterns of social information processing problems and externalizing behaviors. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 715-724.
- Lazar, S. W., Kerr, C. E., Wasserman, R. H., Gray, J. R., Greve, D. N., Treadway, M. T., ... Raunch, S. L. (2005). Meditation experience is associated with increased cortical thickness. *NeuroReport*, 16, 1893-1897.
- Linder, J. R., Crick, N. R., & Collins, W.A. (2002). Relational aggression and victimization in young adults' romantic relationships: Associations with perceptions of parent, peer, and romantic relationship quality. *Social Development*, 11, 1, 69-86.
- Lemrise, E. A., & Arsenio, W. F. (2000). An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. *Child Development*, 71, 107-118.
- Mathieson L. C., & Crick, N. R. (2010). Reactive and proactive subtypes of relational and physical aggression in middle childhood: Links to concurrent and longitudinal adjustment. *School Psychology Review*, 39, 601-611.
- Mathieson, L. C., Murray-Close, D., Crick, N. R., Woods, K. E., Zimmer-Gembeck, M. Geiger, T. C., & Morales, J. R. (2011). Hostile intent attributions and relational aggression: The moderating roles of emotional sensitivity, gender, and victimization. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 39, 977-987.
- Mukhtar, S., & Mahmood, Z., (2018). Moderating role of perceived social support between perceived parenting styles and relational aggression in adolescents. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 27, 831-845.
- 森田洋司 (総監修・総監訳) (1998). 世界のいじめ——各国の現状と取り組み 金子書房
- 森田洋司 (監修) (2001). いじめの国際比較研究——日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析 金子書房
- 文部科学省 (2018). 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 e-stat 政府統計の総合窓口統計でみる日本, Retrieved from [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400304&kikan=00400&result\\_page=1](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400304&kikan=00400&result_page=1). (2019年8月28日取得)
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達と

- のつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Ojanen, T., Findley, D., & Fuller, S. (2012). Physical and relational aggression in early adolescence: Associations with narcissism, temperament, and social goals. *Aggressive Behavior*, 38, 99-107.
- Olweus, D., & Limber, S. (2010). Olweus bullying prevention program: Implementation and evaluation over two decades. In S. Jimerson, S. Swearer, & D. Espelage (Eds.), *Handbook of bullying in schools: An international perspective* (pp.377-401). New York: Routledge.
- Pettit, G. S., & Mize, J. (2007). Social-cognitive processes in the development of antisocial and violent behavior. In Flannery, D. J., Vazsony, A. T., & Waldman, I. D. (Eds.) *The Cambridge handbook of violent behavior and aggression* (pp.322-343), NY, USA: Cambridge University Press.
- Porani, C. D., & Wood, J. (2010). Peer and cyber aggression in secondary school students: The role of moral disengagement, hostile attribution bias, and outcome expectancies. *Aggressive Behavior*, 36, 81-94.
- Prinstein, M. J., Boegers, J., & Vernberg, E. M. (2001). Overt and relational aggression in adolescents: Social-psychological adjustment of aggressors and victims. *Journal of Clinical Child Psychology*, 30, 479-491.
- Rabiner, D. L., & Gordon, L. V. (1992). The coordination of conflicting social goals: Differences between rejected and nonrejected boys. *Child Development*, 63, 1344-1350.
- Rabiner, D. L., Lenhart, L., & Lochman, J. E. (1990). Automatic versus reflective social problem solving in relation to children's sociometric status. *Developmental Psychology*, 26, 1010-1016.
- Raine, A., Portnoy, J., Liu, J., Mahomed, T., & Hibbeln, J. (2015). Reduction in behavior problems with omega-3 supplementation in children aged 8-16 years: A randomized, double-blind, placebo-controlled, stratified, parallel-group trial. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 56, 509-520.
- Richard, B. A., & Dodge, K. A. (1982). Social maladjustment and problem-solving in school aged children. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 50, 226-233.
- Robins, C., Keng, S. L., Ekblad, A. G., & Brantley, J. G. (2012). Effects of mindfulness-based stress reduction on emotional experience and expression: A randomized controlled trial. *Journal of Clinical Psychology*, 68, 50-66.
- Rothbart, M. K. (2011). *Becoming who we are: Temperament and personality in development*. NY: Guilford.
- Smith, P. K., Sharp, S., Eslea, M., & Thompson, D. (2004). England: The Sheffield project. In P. K. Smith, D. K. Pepler & K. Rigby (Eds.), *Bullying in schools: How successful can interventions be?* (pp.99-123). New York: Cambridge University Press.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 298-309.
- 櫻井良子 (2002). 中学生における関係性攻撃の特徴 筑波大学心理学研究科中間論文 (未公開).
- 三鈷泰代・濱口佳和・石川満佐育・江口めぐみ (2007). 青年の能動的・反応的攻撃性に関する研究 (3) ——高校生サンプルにおける因子パタンの検討と下位尺度の構成 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 23.
- Surmeli, T., & Edem, A. (2009). QEEG guided neurofeedback therapy in personality disorders: 13 cases studies. *Clinical EEG and Neuroscience*, 40, 5-10.
- 関口雄一・濱口佳和 (2015). 小学生用関係性攻撃観尺度の作成——2種類の攻撃性との関連の検討—— 教育心理学研究, 63, 295-308.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元視点による検討. 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 内海しよか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験——親の規制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連—— 教育心理学研究, 58, 12-22.
- Verlaan, P., & Turmel, F. (2010). Developmental process and outcome evaluation of a program for raising awareness of indirect and relational aggression in elementary schools: A preliminary study. *School Psychology Review*, 39, 552-568.
- Werner, N. E., & Crick, N. R. (1999). Relational aggression and social-psychological adjustment in college sample. *Journal of Abnormal Psychology*, 108, 615-623.

(受稿 9 月 30 日 : 受理 10 月 26 日)

## APPENDIX. 反応検索・生成ステップ

## カテゴリ

## 昼食時の話

- ①攻撃：相手を汚い言葉で罵倒する，侮辱する，脅す，威嚇するなどの言動
  - ②非難：相手のしたことを無視・いじめなど不当なことで判断し，強い言葉で非難・抗議する
  - ③要求：相手のしたことを無視・いじめなど不当なことで判断し，普通の言葉でその行為・状態の停止・適切な対応を要求する
  - ④表明要請：相手に言いたいことを言わせ，聴こうとする発言  
(何か文句ある？言いたいことあったら言え？)
  - ⑤無視に対する質問：相手の行為を無視と決めつけ，その行為の意図や理由を尋ねる  
(なぜ無視する？なぜ避ける？)
  - ⑥質問：相手の行為を無視やいじわると決めつけず，相手が「話さない」「黙っている」ことの意図や理由を尋ねる，相手が話していた内容を尋ねる  
(なぜ話さない？なぜ黙る？どうした？なんて言ったんだ？何話した？)
  - ⑦自己の落ち度の確認：相手が黙ったことの原因が自分にあるのではないかと思い，確認する行為  
(私が悪い？私が何かしたか？)
  - ⑧自分がいることの適否確認：自分がその場にいることの適否を相手に問う  
(いてもいい？いない方がいい？)
  - ⑨交流促進：黙っている相手に積極的に話題を提供し，自分と周囲との会話が再開する様にする行為  
(楽しく話そうよ他)
  - ⑩ひきこもり行動：相手との交流から身を引き，回避する行動 無言＋他の場所へ行く  
(なにも言わずに黙っている，その場から逃げだす)
  - ⑪謝罪：相手が黙っていることの原因が自分にあると考え，謝罪する
  - ⑫別の場所へ行く
- その他：上記以外の行動

## 得点化

- A. 攻撃・怒り：① (0, 1)
- B. 否定的主張：②＋③＋④ (0～3)
- C. 質問：⑤＋⑥ (0～2)
- C. 肯定的主張：⑦＋⑧＋⑨ (0～3)
- D. ひきこもり行動：⑩＋⑪＋⑫ (0～2)

## 散歩の話

- ①攻撃：相手を汚い言葉で罵倒する，侮辱する，脅す，威嚇するなどの言動  
(「最低」「ウザいんだよ」「調子に乗るなよ」「けんか売ってるのか？」「ちょっと来い」「シカトかムカつく～」「挨拶できないほどバカなの？」「てめえら覚えとけよ」「挨拶できないとか人間失格」「これからは話しかけないから安心してね」「ふざけんな何様なんだよ」etc)
- ②非難：相手のしたことを無視・いじめなど不当なことで判断し，強い言葉で非難・抗議する  
(「無視？ちょっとひどくない？」「何で挨拶してあげたのに無視したの？」「何でそんなことするの？」「うわ～シカトかよ？」「人がせつかく挨拶してるのに，もう絶対あいさつしない」「何やってんだよ？」)
- ③要求：相手のしたことを無視・いじめなど不当なことで判断し，普通の言葉でその行為・状態の停止・適切な対応を要求する  
(「挨拶してるんだから挨拶してくれてもいいんじゃない？」「こっちが挨拶してるんだから挨拶ぐらいしろよ」)

- ④表明要請：相手に言いたいことを言わせ、聴こうとする発言  
(「言いたいことあったら言えば?」)
- ⑤無視に対する質問：相手の行為を無視と決めつけ、その行為の意図や理由を尋ねる  
(「なぜ無視する?」)
- ⑥質問：相手の行為を無視やいじわると決めつけず、相手が「話さない」「黙っている」ことの意図や理由を尋ねる、相手が話していた内容を尋ねる  
(「なぜあの時返事返してくれなかったの?」「なぜ話さない?」「なぜ黙る?」「どうした?」「なんて言った?」「何話した?」)
- ⑦自己の落ち度の確認：相手が黙ったことの原因が自分にあるのではないかと思い、確認する行為  
(「私が悪い?私がかしたか?」)
- ⑧自分があることの適否確認：自分がその場にいることの適否を相手に問う  
(「いてもいい?いない方がいい?」)
- ⑨交流促進：挨拶しなかった相手に積極的・友好的に話しかけ、自分と相手との友好的な交流が再開する様にする行為  
(「さっきあいさつしたんだけどお話し中だった?」「こんにちは(もう一度挨拶する)」「オッス」)
- ⑩ひきこもり行動：相手との交流から身を引き、回避する行動 無言+他の場所へ行く  
(「なにも言わずに黙っている、その場から逃げだす」)
- ⑪謝罪：相手が黙っていることの原因が自分にあると考え、謝罪する  
その他：上記以外の行動

## 得点化

- A. 攻撃・怒り：① (0, 1)
- B. 否定的主張：②+③+④+⑤ (0~4)
- C. 肯定的主張：⑥+⑦+⑧+⑨ (0~4)
- D. ひきこもり行動：⑩+⑪ (0~2)